

教師の力量形成と進路指導教育・キャリア教育
実践の歩みを振り返る

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 巨田, 尚彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/6868

教師の力量形成と進路指導教育・キャリア教育

実践の歩みを振り返る

巨田 尚彦

はじめに

福井大学教職大学院において、教師の実践的力量形成に微力ながらも寄与していくために、自分の役割として果たして何ができるのだろうかということは常に頭から離れない課題である。昨年度『教師教育研究』VOL. 4 では、「教師の力量形成と研修 - 実践の歩みを振り返る」というテーマで、先ず、(1) 教師の力量形成の問題を大きく掲げる福井大学教職大学院の設立に至る経緯と理念を理解し、カリキュラムのもとに展開される活動の中から参加したものを中心に概要を振り返った。次に、(2) 自分自身の拙い実践の概略を辿りながら教師の力量形成の問題と研修について省察し、その中から特に30歳代中盤に長期にわたり体験した国立教育研究所(現在の国立教育政策研究所)の研究協力者としての研修の一部を振り返り、研修の在り方について考察してみた。研究という面ではほど遠いものであったが、恐らくこのような機会がなければこれまでの自らの実践の一部を振り返るなどということは全くやらなかったと思われるので、その点では良い機会を与えていただいたと感謝している。

教育は国家百年の計といわれることと同様、教師の力量も短期に形成されるものではなく、非常に長期にわたる継続した実践によって蓄積されていくものであって、そのプロセスにおける学び合いをいかに充実させるかが重要な論点になる。その意味で、それぞれの時代において取り組んできた私たちの先人、諸先輩の歴史を学び、それぞれの組織においていかに成長線を描きながら接続していくかが力量形成の面で重要である。さらに、現在の時代の変化は想像以上で、加速度的にスピードアップしてきているし、教育の領域も従来とは比較にならないほど拡大・拡散している。このような時代だからこそ、学校教育においても、「不易」な部分は大切にしながらも、「流行」の部分では次世代を遅く生きていく児童・生徒のために、時代の変化を的確に見据えて、果敢に改革・変革を断行していく積極性が必須の課題である。教職大学院においては、このような時代における教師の有り様、力量は何かを研究・考察し、それをカリキュラムに生かしながら教員養成の支援をしてこそその存在意義がある。福井大学教職大学院において頻繁に語られる、「専門家として共に学び合うコミュニティ」「学びの協働体」「学習する組織」「学校との協働を通して実践を深める」「実践と省察」「実践を聴き・読み・語り・書く」などは、その意味において重要なキーワードであり、共感を覚えるものである。このコンセプトのもとで、協働で取り組みながら展開される諸活動は、教師の力量形成の面から大きな力になるものと確信できる。

教職大学院にお世話になることになって、これまでいくつかのプログラムに参加させていただき、教師の力量形成について私自身の実践の歩みに照らし合わせて考えることが多くなった。日々学校に身を置かない現在、私としてはこれまでの体験の中から探ることしかできない。私自身にとって、教師としての力量形成とは何だったのだろうかと考えれば、40数年間の教師としての様々な取り組み

や体験の積み重ねの過程の中で、教師としての力として何が大切なのかを探る道のように思えるのである。子どもたちが環境に育まれて逞しく成長していくのと同様に、教師も環境の中でバランスのとれた信頼される教師として成長していかななくてはならないだろう。教師が時間をかけて育むべき力は、すでにいくつものカテゴリーが提示されてはいるので、それを常に意識して取り組むことで、教師として必要な新たなカテゴリーの創造にも繋がってくるのではないだろうか。従来から、教師の力としてのカテゴリーは、教科指導力や授業力であり、自己研修力や自己学習力であり、また、生徒指導教育力や進路指導教育力、コミュニケーション力やネットワーク力など、そのファクターは時代の流れの影響も受け大変広範囲に及ぶ多様なものである。さらに、このカテゴリーは、細分化されるものである。これらのカテゴリーは教師の力量形成上長期にわたる実践を必要とするもので、私は教師時代を貫くいわば縦軸のカテゴリー(Vertical Category)として捉えている。一方、私自身の教師としての歩みと実践を横軸のカテゴリー(Horizontal Category)としていくつかにまとめ、それぞれにおいて自己評価することによって、私の教師としての3次元の立体像が浮かび上がってくるように思われる。このように考えると、私自身果たして各々のカテゴリーにおいてどれだけ成長していくことができいったであろうか、新しいカテゴリーを創造できたであろうか、私の教師としての立体像の姿はいかがなものだろうかを考えると、かなり厳しい評価を下さなければならなくなる。今の変化の激しい時代において、将来を見据え、教師は長い期間をかけてどのような力を培っていけばよいのだろうか、それぞれ議論が分かれることも知れない。しかし教師の力量は、長い期間の取り組みを通して、この縦軸のカテゴリーを常に意識することによって成長し、それが教師としての喜びに繋がるものになっていくように思える。

今回、『教師教育研究』VOL.5において何を取り上げるかは悩むところであるが、自分の実践を振り返りリフレクションを試みるのが、将来に繋がるヒントを与えてくれるかも知れないと思っている。昨年は縦軸のカテゴリーの中から研修に着目したが、今回は私自身が長期にわたりかかわり大切にしてきた進路指導教育からキャリア教育への拡張の道のを振り返ってみたいと思う。日々激しく変化する現代社会においては、未来のある児童・生徒たちが将来生き生きと自立的にたくましく生きていける力を育てることが大切である。この信念から生まれた概念が、最近取り上げられることが多くなってきたキャリア教育であり、その信念を実現するために学校教育と社会を連続させることの重要性を核とした教育改革を行う運動がキャリア教育であると私は捉えている。この観点に立ち振り返ると、私の長い教師生活のあらゆることがキャリア教育と繋がりをもってくる。そして、そのベースになっているものは、長期にわたり常に意識してかかわってきた進路指導教育に帰着する。

実践の歩み - 5つの横軸のカテゴリー

40年以上の長い教職生活の歩みを振り返る機会を与えられたので、教師教育研究VOL.4において、その概略を辿りいくつかの心に残ることをピックアップして紙片に記し、配置し、それを何層にも分け、最後に次の大きな5つのカテゴリーに集めてみた。この5つのカテゴリーが、私にとって教師としての力量形成の横軸のカテゴリーといえるもので、それはとりもなおさず私の大きな学びのベースともいうべきものである。詳細はVOL.4で記したが、あらためてその主なものを記すと概略は次の通りである。

1 カテゴリー H-1

テーマは教師として自分自身の学ぶ意欲をどう高めるかで、学習指導や学びに直結するものである。このテーマは教師の力量形成に大きくかかわることで、試行錯誤を繰り返しながら今日に至っているが、現在進行中の課題でもある。特に、熱心な先輩・同僚教師・研修会、さらに生徒・保護者・地域社会からの影響は大きく、様々な場面で学ぶことが多い。また、ツールとしての知的生産の技術と情

報整理の習得と改善、さらにパーソナルコンピュータ(PC)・IT(Information Technology)・ICT(Information and Communications Technology)・デジタル教科書などの分野の進化は特に興味深く目を見張るものである。この中で私がずっと楽しんできたのは、知的生産の技術という分野である。梅棹忠夫氏の「知的生産の技術」や川喜田二郎氏の「発想法」「KJ法」などは、時代が変わった今も私のバイブルで、カードやファイルや情報整理など何度となく改良し作り変えて利用してきているが、この楽しみはこれからも続けたいと思っている。中でもKJ法は、アトランダムに浮かんでくるアイデア・思い・情報などを、時間をかけて類似性を頼りに集めていく作業を通して、思いがけないことが浮かんでくる喜びは大変大きいものである。時間がかかり過ぎるという批判はあるが、フィールドワークから創造されたこの手法はデジタルの時代だからこそさらに価値が深まっていくのではないかと考えている。最近ではトニー・ブザン(Tony Buzan)が提唱した、思考・発想法の一つであるマインドマップも学校教育で利用されている。これからの時代、デジタルとアナログをバランスよく使っていくことが大切で、教師の力量形成という面でも学びのツールとして欠かせないものとなっていくと思っている。

2 カテゴリー H-2

テーマは生徒の人生にかかわるといふ重さにどう向き合うかで、担任として、教科指導者として、部活動指導者として、さらに生徒指導や進路指導教育など学校教育の中で生徒を中心に据えた活動である。伝統校のO高等学校(普通科、商業科、家庭科)では、S42～S46の5年間、担任業務、教科指導、部活動指導、進学指導部メンバーとして進路指導(進学指導、就職指導)などに夢中に取り組んだ。特に高等学校における進路指導の取り組みについては、その基本姿勢を学んだ。K高等学校(普通科、理数科)でのS47～S56の9年間は、ほとんど全生徒が上級学校へ進む状況の中で、担任として、教科担当者、進学指導部メンバーとして進学指導中心に打ち込んだ。共通一次試験、F・K学校群解消など教育施策上変化の多い時代で、生徒の人生にかかわる重さを次第に感じ、「進路指導教育の実践は、すなわち教師の哲学そのものである」ことを実感し、自分の未熟さを痛感する時期でもあった。さらにKA高等学校(新設校、普通科、情報処理科、経理科)でのS59～H1の6年間は、開校1年目を経てこれから新しい学校を創るといふ共通目標が明確であった。ミックスホーム制というユニークなシステムと相俟って、教師、生徒、保護者との人間関係を良好にしていくというアットホーム的な雰囲気のもとで教育が進められた。KA高校における進路指導教育は、数年後を視野に地域との連携と新地開拓に奔走し、進学指導部と就職指導部(商業系)がともに一丸となって取り組むエネルギーギッシュなものであった。特に、学年主任としての3年間は、学年全体のダイナミズムと教職員のチームワークの大切さを肌で感じ、学ぶことの多い充実したものであった。

直接生徒を中心に据えたこの20年間の学びは、実践を重ねる中で、教師の力量形成に関する縦軸のカテゴリーとして教科指導以外に、重要な担任業務、学年会、保護者とのかかわり、校務分掌(教務・生徒指導・進路・進学など)などを経験し、多くを学ぶことができた。その中で特に教師として力をつけるべきは、生徒指導力・進路指導教育力(進学指導、就職指導、キャリア教育)であって、そのベースとなるものは生徒の意欲と学習の関係であり、生徒の意欲をいかに高めるかを具体的にどう進めるかが大きなテーマになっていった。

3 カテゴリー H-3

学校を離れた教育関係機関である福井県教育研究所における学びで、テーマは臨床的教育実践の中で学校教育の抱える重要課題を学び、教育ビジョンを考えることであった。研究主事としてS57～S58の2年間と主査としてH2～H5の4年間は、教職員研修講座(中・高進路指導研修、新任教員研修、出前研修)、教育相談事業(来所相談、電話相談、進路相談、学校不適應問題、中途退学問題など)、事例研究会、コンサルテーション事業(学校、地域)、広報活動(刊行物、新聞、雑誌ほか)などの業務に取り組んだ。さらに、児童生徒理解のためのマイライフ事業(マイライフの開発・実施、小学

生・中学生・高校生対象）、不登校児童生徒のための支援事業として適応指導教室（フレンド学級、小学生・中学生対象）に取り組んだ。異分野の多くの人たちとの出会いからの学びは大きく、学校教育における様々な課題を、これまでの歩みとは別の視点から捉える非常に貴重なものであった。進路指導研修講座を企画実施する立場になり、これまでの実践の総括と新たな業務を経験することで、従来の進路指導教育をさらに拡張して捉えることの大切さを痛感し、取り組みの中への導入を試みた。

4 カテゴリー H-4

組織を管理・運営・経営する立場になり、システムの力をつけていくために人材と人のつながりの力がいかに大切かを学ぶことがテーマとなった。県教育研究所の相談課・教育相談課課長としての H6 ~ H10 の 5 年間、K 高等学校（普通科、理数科）の教頭としての H11 ~ H12 の 2 年間、O 高等学校（本校：普通科、定時制：昼間二部制）の校長としての H13 ~ H14 の 2 年間、T 高等学校（本校：普通科、理数科、定時制：単位制、分校：中高一貫）の校長として H15 ~ H16 の退職までの 2 年間の計 11 年間は、これまでストアしてきたことをアウトプットすることと、自ら積極的に学び、ビジョンを明確にし、あらゆるシステムの活性化を図ることであった。進路指導教育面では、校長として特に進路指導の充実を柱に、学問発見講座・職業発見講座・大学発見講座・進路講演会などの外部教育機関との連携活動や、キャリア・カウンセリングの充実、さらに進路指導室・進路資料室の環境整備などを通し、生徒・保護者に対する意識の向上を重視した。また、オープンスクールの充実と広報活動を通して、中学生の進路学習に寄与する取り組みを大切にした。

5 カテゴリー H-5

私立学校にお世話になることになり、未知の私学教育に携わることを通して学校教育の広がりを学ぶことと、私学教育の魅力の創造と発信がテーマとなった。K 学園 FK 大学教養部特任講師として H17 ~ H21 まで勤務し、H18 ~ H21 の 4 年間は FK 大学附属 F 高等学校、同衛生看護専攻科の校長を兼務し、H19 ~ H20 の 2 年間は FK 大学附属 F 中学校の校長も兼務した。教養部特任講師として数学の講義を担当し、学生とのかかわりを通して大学と高校教育の接続の課題や高校の進路指導について全く別の視点で捉えることができたのは貴重であった。附属 F 高等学校は、多学科・多コースであったため、その再編整備を計画的に実施した。第 1 期は 6 学科 11 コースを 3 学科 13 コース（普通科、工業科、衛生看護科・専攻科）に改編、第 2 期はさらに 3 学科 7 コース（特別進学科、進学科、衛生看護科・専攻科）に改編し、ドラスティックな改革を通して魅力アップを具現化した。教育方針は建学の精神のもと文武両道を掲げ、教育の質的向上を目指して教育の中心にキャリア教育の推進を据え、キャリア教育課を設置し、生きる力を育む基礎学力を始めキャリア教育のプログラムを実施した。また、校内研修会の実施、ワークショップ、キャリア教育支援教材の充実、進路支援システムの構築、進学指導・就職指導の強化をはかり、生徒の夢を実現させる指導を推進した。そのために新設した進学指導センターは、核になる学習センター・キャリア教育センターとして生徒・保護者・教職員が活用し、教育活動の指針を策定した教育アクションプラン・プログラムの内容にも、キャリア教育課のプランを取り入れ全教職員の共通理解を図った。

以上 5 つが私の横軸のカテゴリーの概略である。当然抜け落ちているものも多くあると思うが、このすべてに縦軸の多くのカテゴリーが交差し、それぞれにおいて学びの成果と力が形成されていき、その総合体としての立体像がバランスよく成長し続けるのが、教師の力量形成として一つの理想であるようにも思えるのである。ここではそれぞれのカテゴリーにおいて特に進路指導教育、キャリア教育に関することを簡単に付記したが、それぞれにおいてもう少し振り返り、進路指導教育からキャリア教育への拡張に至る歩みを辿ってみる。

進路指導教育

1 進路指導教育のスタート

私が教職についた1967年(昭和42年)から教育研究所時代までの約30年間、進路指導教育の変遷と相俟って、私自身の進路指導の捉え方も時代の状況や経験とともに変化していった。高等学校においては、殆どの学校において進路指導部もしくは進学指導部や就職指導部が組織されている。最初赴任した〇高校でも同様で、私は担任を持ちながら校務分掌として進学指導部に配属され、先輩諸氏の指導のもと業務に携わった。大学を出て間もなくであり、教科指導や担任業務や部活動を中心に考えていて、進路指導部などのように対外的に大変忙しい領域があるということに驚いた。その当時の高校全日制は学科の整備もあって普通科、商業科、家庭科の3学科であり、進学希望者だけでなく、就職希望者も多く就職指導部の業務も大変忙しいものであった。私が最初担任した普通科のクラスにも進学を希望する生徒、就職を希望する生徒が混在していた。私は若干のクラス替えはあったものの3年間このクラスを持ち上がりで担任したので、入学から卒業まで学校生活を共にし、かなり密度も濃く、ある意味では彼らの高校卒業以後の人生ともかかわっていくことになった。そのかわりには現在でも継続しているもので、私にとっては大きな財産でもある。その当時は日本経済の高度成長期でもあって、大学を始めとした上級学校が次々と設立され、進路指導において遅れてはならじと情報収集が要求された。上級学校側の広報活動も、見学会なども企画し活発化してきた時期でもある。しかし、現在のように便利な情報機器があるものではなく、関係する教師には、自分の目を見て、自分で書いて、生徒や保護者にわかりやすくしかもできるだけ早く伝えることが要求された。例えば進学指導においても、大学名、学部学科コース、受験科目、合否ラインなどは学校独自で作成し、その資料づくりは最後にガリ版で原紙を起し印刷する作業を行うもので、このことは進学指導担当者の大きな業務で夜遅くまで資料づくりに追われたことを思い出す。この当時は、受験産業関係業者も限られていて、全国レベルの模擬試験は数少なく、学校独自の校内模擬試験や地域の中での模擬試験が中心で、生徒が自分の学力を全国レベルで把握することは中々困難であった。〇高校では、特に隣地域のK高校と2校での模擬試験(DK模試と呼んだ)を行いデータづくりの参考にしていた。この当時全国模試実施後3年生のN君が好成績を取り、教師サイドは「よくやった!もう大丈夫万全だ!」と褒めたところ、「駄目です、第一志望、第二志望の動向を予想すると定員ぎりぎりです。特に国語と世界史が課題なのです」と自分を厳しく分析していた。その分析は説得力があり、実に理論的であった。指導に当たる教師にとって、データを読む力の大切さを彼から教わったとも言える。生徒は真剣なのであって、生徒の将来にかかわることをいい加減には済まされないのである。このことは、これまでずっと私の中に残っていて、折に触れて思い出すことである。彼は現役で見事目的をクリアして、大学へ進んでからも何度か拙宅に顔を見せ高校時代のことを語ってくれたが、その話題は殆どが数学に纏わるものがあった。数学の授業を介した彼との出会いは、いろいろな面で私を教師として鍛えてくれたと思っている。行き過ぎた進学指導は、ややもするとただ実績を出すためだと批判される傾向があったが、彼のような人材を育むという役割に胸を張って取り組める教師でありたいとも思った。その当時、進路指導を中心となって担当する教師は、長い経験の積み重ねが必要で特別職の感が強く、校務分掌上も固定化していて若干の違和感はあった。どこの学校でもあることであるが、進学指導や就職指導と部活動指導において、その指導者が中々歩み寄れない部分が出ることがある。それが学習面での補習等の時間と部活動の時間のバッティングの問題であったり、時には行き過ぎた進学指導を否定する発言であったりすることがある。私はその当時部活動にも熱中していたが、それぞれの立場に立った先輩教師の真剣さを見るにつけ、生徒の夢を実現に近づけるために、あらゆる力を駆使して指導援助することは教師としての大きな責務であることを学んだ。「行きたい大学には成績が届かない、浪人はさせてくれないし」「先生、進学しようか就職しようか迷っている」「将来保母

さんになりたいけれどどう進んだらいいのか」「専門学校へ進みたいが大学とどちらがいいのか」「看護婦さんか助産婦さんになりたいがどうしたらいいのか」「将来消防署で働きたい」「親がすすめという方向には行きたくない県外へ行きたい」など・・・、生徒たちの思いは様々な形で次々と私のところへやってくる。〇 高校では5年間勤務したが、教師になって間もない自分がどう生徒たちの力になってやれるのかを思う時、自分の無力さを感じると同時に、教師の役割は、教科指導、担任としての指導、生活指導部、部活動の指導、そして進学就職指導という生徒の人生にかかわる重大さを認識していった。ここでの5年間が、私がこの後ずっとかかわっていくことになる進路指導教育・キャリア教育のスタートである。

2 進路指導教育は教師自身の哲学そのものである

1973年(昭和48年)から9年間福井市内のK高等学校に勤務した。普通科と理数科1クラスからなる福井県の中でも1、2の大規模校で、いわゆる進学校である。この9年間の進路指導を振り返ると、学校全体がどちらかといえば進学指導中心で就職指導担当部門は置かれてはいたが少人数の構成であった。最初は2年生の副担任をしたが、生徒たちは学習や部活動への取り組みが良好で、全体的に学校へ来るのが楽しいという雰囲気を持って学校生活を送っているのが伝わってくる素晴らしいものであった。その後、私は2サイクルの6年間担任をして、そのどちらも本当に心に残る学年であった。最初の1サイクルは、1年時のクラスは男女混合であったが、2年からは編成替えで学校始まって以来の男子ばかりの理系のクラスになり、2年、3年と引き続き担任をした。新しい赴任校での最初の担任ということもあって、1年、そして男子ばかりの2年、3年のクラスはいずれも大変思い出の多いクラスとなった。その後の2サイクル目は、女子生徒が2名だけの理数科で、このクラスは3年間通して担任をし、生徒と苦楽を共にした。この3年間は、様々な面で教師としての責任の重さを感じさせられることが多く、教師としての力量を向上させなくてはいけないことを強く思った。進路指導教育の面でも、入学から卒業までの責任の重さを日増しに感じていった。K高校の進学指導部は大人数で部長のリーダーシップのもとベテランの教師で構成されていた。私が配属されたのは数年経ってからであるが、業務は多岐に及んでいた。パーソナルコンピュータが少しずつ普及し、まだ出力は仮名の時代で、シャープ製のMZ80、その後NECPC8001などが出てきて少しずつではあるが学校事務分野CMI(Computer managed instruction)において使えるまでになってきた。進学指導部でも、模擬試験などの成績処理をPCを使ってできないかと、堪能な人を中心にチームを組んで長いステップのプログラムを長時間使って作り、試行錯誤の時期を経て利用できるまでになってきた。私も本当に熱中した。学校の業務だけでなくプライベートにも、生徒たちのデータ分析や成績処理やCAI(Computer assisted instruction)分野に夢は広がっていった。その当時、私が大枚をはたいて購入したのは、日本のベンチャー企業SORDC社が独自に開発したPCで、プログラミングがより改善され常によきパートナーであった。これは、数学の教科指導に、クラスの運営に、学校の業務に、プライベートな情報管理に大きな力を発揮する実に重宝なもので、私は夢見ていたことが実現していく喜びを仕事をしながら強く感じていた。丁度その頃、このSORDC社のPCを用いて起業しようという方が福井にもおられることを知って、いろいろ話をお聞きする時間が持てた。その後数人で会社を立ち上げ10年足らずに全国的にも大きなベンチャー企業になる様子を目の当たりにした。今振り返ればサクセスストーリーであるが、起業する時の様子はまさに将来日本の状況が変化していくこと、そしてこの福井においてもこのような方がおられることを生徒たちにも話したことを思い出す。IT関係については授業でも取り入れていたので、理系のかなりの生徒たちが興味を持ち、この分野へ進んで現在も活躍しているが、社会状況がこのような時期でもあった。また、大学入試が大きく変化し、大学共通第1次学力試験が行われるようになったのもこのような時期である。大学共通第1次学力試験は、1979年1月13日・14日から1989年1月14日・15日までの11年間11回に渡り、すべての国公立大学および産業医科大学の入学志願者を対象として全国の各会場で共通の試験問題により一斉に実施された。基礎学

力試験で一般的な呼称は、「共通一次試験」あるいは「共通一次」と呼ばれた。1990年からは名前を変更して大学入試センター試験となって現在に至っているが、学校側はこのような改革によって、多大な対策のためのエネルギーが要求されるようになる。これらの対策は進学指導部のリーダーシップのもと、スピーディーに各学年をはじめ全校へ広げていった。その頃から、受験を支援する予備校が次第に進化し、共通一次試験のデータ処理はもとより、より大きな地域や全国規模で実施する公開模擬試験のデータ処理を大型コンピュータを用いて実施し、比較的短時間で結果処理などを提供するようになってきていた。学校内での成績処理量が大変多くなってきたので、進学指導部のメンバー3人がN市のK予備校へ出かけて、校内模試の成績処理を大型コンピュータで請け負ってもらうことは可能かと相談に行った。今でも鮮明に覚えているが、理事長室で直接理事長と話をしている中で、「将来わが予備校が、教育の質の面でも全国の高等学校を凌駕する存在になることを目指している」とあまりにも熱く語るのも、その意気込みに驚くと同時に、別の世界を垣間見て「たかが予備校、されど予備校」と時代の変化を感じ「予備校に負けるようではだめだ」と帰路の車の中で話し合った。その後校内模試の処理はこのK予備校の力を借りることになったが、このように進学指導においては受験産業が少しずつ介入するケースが増えてきた。そして当然のことながら広く全国を視野に指導を展開していくことになる。殆どの生徒たちが大学を目指す学校において、受験に打ち克つ学力と気力と体力は大きな課題であることに異論はなく、生徒たちには、目標を設定し厳しい課題を課してきた。大学だけが人生ではないと思いつつも、目の前にいる生徒には何とか目標をクリアしてほしいと、ポケットにはいつも全員のデータを忍ばせて、個人別のファイル(ポートフォリオ portfolio)をもとに、それぞれの生徒について考える日々の連続であった。知的生産の技術という分野は特に興味があり、カードやファイルや情報整理などは試行錯誤を何度となく繰り返し、改良を加えながら学校での様々な分野で使用し、生徒にも還元することができた。このような分野を楽しむことができたのも、教師という仕事につき、常に成長していく生徒がいたお陰であると強く感じている。K高校での勤務を重ねていく過程において、進路指導は出口指導では無いのだと思いつつ、生徒の将来の人生のために今この厳しい状況を打破しないといけないのだから、進学指導体制に更に貢献できるように力をつけていこうという気持ちが強くなっていった。担任をしている時は、先輩教師の力強い協力が何よりも嬉しかった。学校組織においても、一人の力は限られている。良好な同僚性は大きな力を生むことを実感し、感謝の気持ちを至るところで感じるが多かった。入試が迫ってくると、学年全体でプログラムを組み、クラスを解いていくつもの講座を設けて特別補講を行った。例えば「巨田の微分方程式」のような講座を設け、テキストをそれぞれ別刷りし、生徒のやる気を喚起した。厳冬期の寒い中学生徒たちは早く来て、ストーブに火をつけて教室で待っている。このような生徒を前にすると、厳しい受験であるが私の方も幸せな気分になり、教師としての有り様を見直すようになってくる。まさに生徒によって、教師が成長させられることを感じる瞬間である。担任している理数科の生徒が、共通一次試験(実施から2年目)を間近にしてどうも雰囲気は堅く緊張しているように見えるので、ホームルーム委員と相談してホームルームの時間に落語を聞かせる企画をした。私は、私の好きな落語の中から桂枝雀の「雨乞い源兵衛」のテープを準備して聴かせたが、随分面白いのに全く笑わないので当惑してしまったことを思い出す。後のクラス会では、「それくらい緊張していた」などと懐かしい話になる。その時期の生徒たちの緊張度は、計り知れないものがあつたのだろう。2次試験の地元大学の合否発表の日は大挙して拙宅へ押し寄せ、お互いに喜び合ったのは大きな思い出である。K高校での9年間は、私にとって高等学校での進路指導とりわけ進学指導について色々鍛えられた時期であった。高等学校生活3年間で生徒たちはそれぞれ何らかの形で進路決定をし、それをクリアするために努力していく。しかもこの進路決定は、以後の人生をかなりの部分方向付けしていくことになる。卒業後様々な形で再会しその表情に接するとき、高校時代の進路指導を振り返ることになるが、生徒の人生にかかわることの重さを感じると同時に、その分かかわれたことの喜びも大きい。

この K 高校での 9 年間の多くの出会いの後には、理系であっても文系を目指すことになったり、大学へ入っても途中で方向転換して別の大学や他の分野に行ったり、様々な形があろう。生徒の人生にかかわるといふ進路指導教育は、自分自身が教師として、そして人間としていかに在るかという「在り方・生き方」の問題に帰着してくる。すなわち、教師自身の哲学の問題に帰着してくるのである。先輩教師の立ち居振る舞いに学びながら、このような思いを持ちながらの K 高校であった。

3 キャリア・カウンセリングとの出会い

K 高校において最後の年の 4 月から 9 月までの半年間、私は東京都の国立教育研究所（現在の国立教育政策研究所）の研究協力者として、世田谷にある福井県の宿舎に身を置きながら、半年間の長期にわたる研修を行う機会を得た。このことについては VOL.4 で触れたが、次の内容は、この折に進路指導・進路相談についてその時点での思いの概略である。

高等学校における進路指導・進路相談についての一考察

進路指導について 学校では進路指導部などが中心になって、様々な情報を担任、生徒へ流したり、ガイダンスを行ったりしている。そして学年会、担任と熱心にその指導にあたっているのが現状である。また、相談室も協力して、適性検査などを実施することもある。進路指導は一年生から当然必要なことであると思うが、その具体的な働きはやはり二年後半ぐらいから始まる。それに従って進路のことで悩む生徒もかなり多くなって来る。それは進路のことにとどまらず、意外と深い内容のものも多い。この頃になると特に、生徒は自分自身についての次のような情報を改めてよく見つめるようになる。

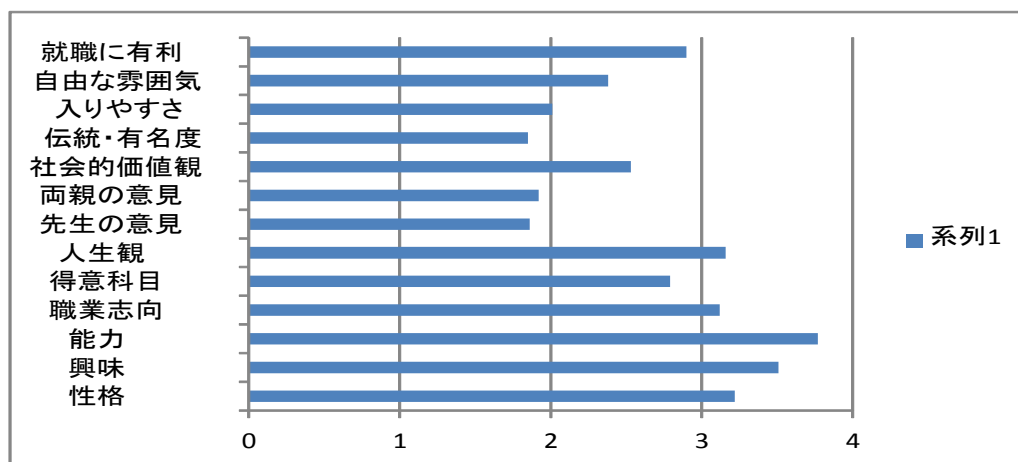
興味、性格、能力、身体的特徴、自分の人生観・価値観、得意科目、
経済的条件、親の考えと自分の希望との関係

そして、自分が希望する進路の方向についての知識、情報として

将来の職業に関する必要な知識や情報

大学の学部・学科に関する必要な知識、情報

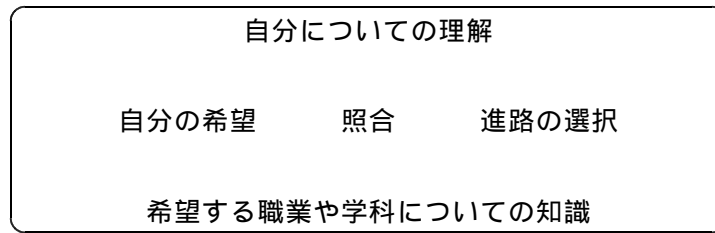
などが外部からも与えられるが、生徒は自らこれを得るために積極的になる。その結果、現実の厳しさをあらためて見て、劣等感に悩まされたり、自信を無くしたりする生徒も多い。次の表は、本校の高校 3 年の生徒が、自分の進路を選択するときの基準として、次の各項目について、それぞれがどの程度重要と考えているかを見たものである。



4 段階で評価し、4 が最高、1 が最底

これを見ると、自分の能力や興味、性格などを選択の基準として重視していることがわかる。また実際に自分の進路を選択するとき、自分の興味や性格、能力などについて客観的に理解し、自分で自分を眺めてみることは大切である。

進路決定の過程は次のようになるであろう。



このように考えると、相談室などが行う性格検査とか、進路適性検査、職業興味検査なども、信頼性の高い検査ならそれなりの意味があるであろうし、正しくこれを使うならば進路相談の一つのきっかけにもなるであろう。事実、この検査をしたあとの生徒については、非常にその結果に関心を示し、知りたがる傾向にある。それだからこそ、なお一層検査実施の際の慎重さが要求されるであろう。実際、進路の相談に来て、生徒が家族の問題、友人関係、自分の性格などについて話すようになることも多い。このように生徒自身が今感じている問題を、進路ということを手掛りにして話し始めることもある。また面接を通して、自分の進路についてより深く考えるようになる生徒も少なくない。相談面接で進路の問題を扱いながらもその中で生徒が自分自身を明確にし、決定し、成長していけるように援助することは可能であると思うのである。進路に関する相談の場合留意すべきことは、生徒が何を欲しているのかを教師が的確に捉えることである。即ち、進路のことで相談にくる生徒の中には、進路に関する知識、情報を求める場合も多いが、時には、進路のことで相談があると生徒が言っても、実際は別のところに問題を感じていたり、悩んでいる場合が少なくない。進路に関する面接では、生徒が本当に話したいことは何かということ面接の初期の段階で的確に捉えることが必要であろう。私の昨年の子供との進路相談を振り返ってみると、毎日の慌ただしい中での落ち着かない相談で、増々生徒を不安にさせてしまったのではないかと気になる。ただでさえ、その時点において点数、成績に敏感になっている生徒たちである。進路相談に際しては、本当の意味での落ち着いた雰囲気は何よりも必要である。生徒たちには、自分の納得のゆく人生を歩んで欲しいとつくづく思う。決定するのは、生徒自身である。たとえそれが厳しい選択であることがわかっていても、自分の力で覚悟を決めて納得のいく道を選んで欲しいと思うのである。微力であっても、私はそのための手助けを精一杯していきたい。このような気持ちで生徒たちとかがかわってきたつもりである。これからもまた沢山の生徒たちと、進路指導というものを通してかかわっていくことになるが、生徒の気持ちを理解し、共に考え、悩む中で、生徒が自主的に自分の道を決定し、自分の意志で進んでいける、そのような支援をしていきたいと思うのである。

進路指導、進路相談について、36歳頃の思いであるが、卒業生を出して感慨深く、進路指導とは何か、そして教師として何ができるかなど、その大変さを感じていた時期である。この時期に関東のいくつかの高校を訪問取材させていただいた。主題は生徒指導・教育相談であったが、神奈川県私立 K 高校を訪問させていただいた時、関係の先生からお話をお聞きする中で、本校には相談室とは別にキャリア・カウンセリングセンターがあり、担当者が常駐していることを伺った。後で部屋も見せていただいたが、それはセンターといっても小さな1部屋であった。その時はあまり気に留めなかったが、このキャリア・カウンセリングセンターという言葉は、以後ずっと頭から離れないものになっていった。神奈川県は生徒指導・教育相談活動においては先駆的なところで、熱心な先生方は自発的な活動をされていることは知らされていたので、この訪問は私にはとても価値あるものであった。そして高等学校において「キャリア」という言葉が一つのキーワードとして私の心に残ることになった。

4 進路指導教育の基盤は、豊かな人間性・学ぶ喜び・燃える希望

その後、福井県教育研究所（研究主事）に異動になり、その2年後に急遽前年1983年(昭和58年)

新設された KA 高等学校に異動になった。学校を最初から創っていくという集団に加わった 6 年間の貴重な体験は、私の後の教師生活に大きな影響を及ぼすものであった。KA 高校は地域の方々の念願がついに実現した学校ということで、校長の強いリーダーシップのもと、新しい学校づくりがスタートしたばかりであった。私が赴任した時は、2 年生 6 クラス、新入生 6 クラスで、各学年普通科 4 クラス、情報処理科 1 クラス、経理科 1 クラスで、新しい恵まれた校舎・環境の中、教師集団も生徒たちも希望に満ちあふれ、高等学校では珍しく家庭的雰囲気のある学校であった。地域の方々との関係は町長を始め密で、支援する委員会も組織されていた。普通科と職業系の学科が混在するので、生徒指導の観点からミックスホームという横割りのホームシステムをとった。すなわち生徒は各科におけるクラスと、それぞれの学年において普通科、情報処理科、経理科をミックスしたホームを 6 ホーム作り、生徒はクラスとホームに同時に所属することになる。従って、担任も二人いることになる。様々な活動の詳細はここでは記せないが、基本的には教科の授業はクラスで、ホームルームや学校祭・体育祭など学校行事はホームで行う。ユニークな編成は、生徒や教師との複数のコミュニティを活動の場とし、生徒同士、生徒と教師のより良いコミュニケーションを醸成することになる。

この新設校において進路指導をどう進めるかは大きな課題であった。進路指導部としては、できるだけ早く進学指導体制と就職指導体制を構築して、新設校として外へ発信することは必須条件であった。この時の教師集団のアプローチは、まさに一丸となった緻密な取り組みで、リーダーを中心に 1 年、2 年、・・・と粘り強い活動をしていった。新設時から 3 年後以降を視野に様々な取り組みがなされ、2 年目からはその活動が本格的になった。なんと言っても新設して間もない知名度も実績もない学校が、一般社会と連携を取り信頼関係を気づいていくことは容易ではない。就職指導では、将来を見越して会社企業開拓を先ず近辺の地域からスタートし、県内、県外へとネットワークをもとに広げていった。就職指導に関することは主に商業系の教員が担当したが、地域の方々や P T A 関係の協力が本当に大きかった。情報処理科の生徒に対しては情報処理検定 2 種の取得、経理科の生徒には簿記検定と珠算検定が大きな関門で、取得に向かって教師・生徒が一体となって取り組む姿は実に迫力があつた。多数の合格者を出し、その度に皆でそれぞれの労をねぎらったことを思い出す。また、社会への接続教育として、職場見学や地域の方の協力をいただき実施した模擬面接、さらには卒業生が出た後は就職先輩を囲む会なども定期的に行っていた。生徒が進路を決定しそれをクリアしたいと思う時、本当に大きな力を出すものである。A 君は入学当時から人間関係が苦手で、学校では殆ど毎日話をしない、いわゆる緘黙傾向の生徒で、多くの教員が色々指導に当たっていた。3 年生になり就職希望者に対して模擬面接を数回行うことになったが、教員の間では A 君は難しいかも知れないと心配していた。いざ彼の順番になった時、私たちは本当に驚くことになる。彼は実に見事に大きな声で、受け答えをするのである。「進路指導は生徒に大きな力を与える」ことを、後で先輩教師としみじみ語り合ったのを思い出す。A 君は希望するところに採用になり、担任にとっても本当に嬉しい結果となった。進学指導体制では、進路指導部の経験豊富な部長を中心としたリーダーシップで、1 年から進められていった。フル学年が揃って数年後には、夏が暑いので A 町にある研修センターを貸切り、全校体制で就職希望者も含めて宿泊を伴った特別学習合宿を数日間行った。数人の教師は宿泊し、全教師の協力で「夏季ゼミナール」を行った。この期間は、まさに「学校が移動する」という状況であった。3 年生の合否判定に関する資料づくりと検討会は、A 町の旅籠に宿泊して夜を徹して行った。今思えば、行き過ぎとの声も聞こえてくる状況であったが、学校づくり、生徒のためにと、燃える気持ちで取り組んでいたのである。学校において教師集団のひたむきな雰囲気は、生徒たちに無言の力を与える。最初の 3 年生が共通一次試験を受験する日が近づき、試験会場まで全員バスで行く計画をしていた。当日雪による渋滞が心配で、その前日実際バスを走らせてもらい当日のシュミレーションを行った。そこまでしなくてもという感じもするが、生徒にとっては一回きりの大切な試験であつて、学校側は万全を期したのである。このように様々なことにおいて、リーダーのもと知恵を出し合い、

皆で議論し、最終決断をし実行していくダイナミズムが、教師にとっては大きな宝になったと思っている。

私は5回生の学年主任を3年間担当したが、12名のクラス担任、ホーム担任は本当にチームワークがよく、クラス、ホームの別なく全教員が全生徒を見ていこうという共通理解で、卒業まで共にすることができた。この3年間は、最初の能登青年の家での宿泊研修に始まり、ホームルーム活動ではホームも解いて体験学習をふんだんに取り入れた。保護者との連携では創立当初からPTA活動が活発で、進路委員会の方々も積極的に、進路講演会、職場訪問、大学訪問を企画し実行した。学年会としては学年便り「琳子梅」というネーミングで3年間保護者への情報発信をし、地区別懇談会では進路情報や進路相談も行い、進路に関する情報も1年から取り上げ意識の喚起を行っていった。豊かな人間性・学ぶ喜び・燃える希望をキーワードに、生徒たちに活力と自信をつけることが大きなテーマであった。2年の九州方面への修学旅行は生徒たちとも協議し、ただの物見遊山の修学旅行でなく、希望によって数社の企業訪問と大学訪問を企画し体験的な学習を取り入れるなど、従来の形を脱却する取り組みをした。これらは担任団が学校行事の意味づけを根本から議論していく過程で自然と生まれていったことで、前向きで緊張感もあるものであった。進路指導においては、担当者のアイデアや進路指導部の協力で、どのクラスにおいても常に話し合っただけで安心して進めることができたことは本当に良かったと思っている。学年主任は3年時慣例的に進路指導部の副部長になって、進路指導部と連携して学年全体の指導を強化することになっている。資料や特別補習なども部と学年会が合同で取り組み、進路指導にかかわる会議も合同で行うシステムである。2年生の修学旅行団が、慣例として太宰府天満宮のお札を買ってきて3年生に贈ることになっていたが、都合で手に入れることができないことがあった。万全を期すことをモットーにしているので、若い先生方や学年に少しでも不安を与えないようにという理由で、部長と二人内緒で土曜の夜遅く出て太宰府まで汽車を乗り継いでお札を取りに行き、月曜日にそっと神棚に飾った出来事を思い出す。「たかがお守り札」であるが、進路指導において万全を期したいという思いが強いのは、生徒のこれからの人生にかかわるといふ重さと喜びからであろう。今でもその先生にお会いすると、決まってこの話が話題に出て、その当時の気持ちに戻る。

KA 高校においてリーダーとなった教師は、それまでにいくつかの学校でそれぞれ豊富な経験を持ち実績のあるベテラン教師であったので、若い教師に対しての影響力も大変大きく方向性がはっきりしていた。若い先生方には校務に追われては自分が学習する時間がないので、校務を調整し空き時間には図書室で学習する時間を確保するなどの配慮もしていた。その当時、周りからは「KA 高校は不夜城」だと言われるくらい夜遅くまで業務に当たっていたが、その雰囲気の中で、教師の力量を育む要素である、「高等学校教育で生徒にどのような力を育むか」「授業力」「教師が成長する学校」「学校の教育力」「リーダーシップ」「地域との連携」「管理職の有り様」「学校マネジメント」など様々なことを身近で学ぶことができたのではないだろうか。私自身も中堅の教員ということもあって、KA 高校では多くの経験を積ませていただいた。お世話になった校長先生方、諸先輩方、同僚の先生方には本当に大きな財産をいただいたと、心から感謝している。現在も発展し続けている KA 高校を思う時、頼もしさを感じるとともに、その創設期に思いを馳せエールをおくらずにはいられない気持ちになる。

進路指導教育におけるパラダイムの転換

KA 高校での勤務が6年間過ぎて、1990年(平成2年)4月、思いがけず再び福井県教育研究所の同じ課へ異動することになった。ここでの二度目の勤務は、主査として4年、1994年(平成6年)4月から相談課課長として3年、1997年(平成9年)4月から教育相談課課長として2年の、計9年間にもわたり、私にとっては長い教師生活において一つのターニングポイントになるものであった。教

育研究所における二度目の生活は、コミュニティ作りの面でも、ネットワーク作りの面でも、そして教育と研究とのかかわりの面でも、人的財産に恵まれ様々な新たな体験や実践を行うことができ大変充実したものであった。この期間は再度学校を離れての業務ということで迷いも大きかったが、これまで培ってきたものをベースに、常に学校・生徒の視点に立って業務に当たれば、学校を離れているという寂しさも克服できると言い聞かせて取り組むことにした。課の業務は以前2年間勤務した時とは大きく変化し、様々な業務を通して教師の力量形成について考察する機会に恵まれた。私にとっては、質的にも量的にも大変刺激を受ける状況であった。この9年間では、学校教育における進路指導教育、そして更に、来るべき時代の新しいキャリア教育の重要性を認識していくことになる。

1 進路指導研修講座

教育研究所においては、多くの研修講座や外部へ出かけてのいわゆる出前研修などを担当した。その中で、中・高進路指導研修講座も数回担当した。1991年～1993年（平成3年～5年）の頃は、進路指導の方向の転換期であったので、毎年中央講師の先生方をお願いし、進路指導にまつわる動向をできるだけ早く伝達するために基調講義をしていただいた。その内容は、「在り方・生き方教育」に取り組む基本的な心構えや、実際取り組んでいる学校のこと、さらに偏差値問題が浮上してきた時期であったのでその話題が取り上げられることも多かった。私は、そのような流れも踏まえて高等学校における進路指導教育の基本的なことをピックアップして取り上げた。しかしベースになっているのは、教師になってからこれまで実践してきた自分なりの進路指導教育に対する考え方や思いであった。この時点で学習指導要領で取り上げられている内容は、自分の変遷してきた捉え方と共感することも多く、むしろこの進路指導分野を学校教育においてもっと強調して欲しいと思っていた。また私は1講座2日間の研修講座の進め方について、受講する先生方がただ講義を聞くだけの講座を変えたいと思い、一部参加型の演習等を取り入れたプログラムを組んで実施した。受講される先生方は、進路指導担当の先生方が多かったので、進学や就職関係の情報が得られると思われて参加された方も多くおられて、戸惑われる雰囲気も若干伝わってきたが、演習のプログラムを実地していく中でその心配も払拭されてきた。講座の後の評価アンケートの中でも、この戸惑いがいくつか書かれていたが講座のねらいは理解いただいたようで安堵した。この時点での、進路指導教育の要点としては次のような内容である。

（1） 職業指導から進路指導へ

米国の職業指導（Vocational Guidance）が日本に導入されたのは、大正期になってからである。その後職業指導運動が萌芽し職業相談が試みられた。このような動きに呼応するかのように学校教育でも職業指導の重要性を認識し、これを取り入れて子どもたちに取り入れる学校が出てきた。文部省が1927年（昭和2年）「児童生徒の個性尊重及職業指導に関する件」を通達し、職業指導を正式に学校教育に導入を決定するとともに、学校職業指導の充実を図った。この訓令の通達をもって、我が国の学校職業指導の出発点とするのが一般的見解である。以後1957年（昭和32年）までは職業指導の時代が続き、その後進路指導という文言が職業指導に置き換えられた。そして、職業指導からキャリアガイダンス（Career Guidance）、キャリア発達（Career Development）、進路相談（Career Counseling）に視点が多ってきた。1986年（昭和61年）臨時教育審議会第2次答申では「生き方」の指導が指摘され、さらに1989年（平成元年）学習指導要領の改訂で「生き方の指導」としての進路指導が強調され、進路指導が「生き方の指導」としての進路指導に発展することになる。1958年（昭和33年）～2003年（平成15年）頃までは、進路指導の時代といえることができる。

（2） 進路指導の基本的な考え方

「進路指導の手引き 高等学校HR担任編（文部省）」において、進路指導は、生徒の一人一人が、自分の将来への生き方への関心を深め、自分の能力・適性等の発見と開発に努め進路の世界への知見を広くかつ深め、やがて、自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよ

く適応し、社会的・職業的自己実現を達成していくことに必要な生徒の自己指導能力の伸長をめざす、教師の計画的、組織的、継続的な指導・援助の過程であるとしている。「学校教育法」においても、進路指導は高校教育の目標達成に不可欠のものであるとしている。このことは、「社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な技能を習熟させる」という精神を受けたもので、進路指導の意義・目的は、個々の生徒がそれぞれの個性（能力・適性等）を伸長し、主体的に自らの生き方を考え、進路を選択決定し、そこへ進んでいくなかで自己実現を遂げていくことを援助することであるとする。従って進路指導は学校・教師によるサービス活動ではなく、教育活動であって、適材適所主義（マッチング方式）によるものではなく、キャリア発達により進路の選択決定を実現可能にするものであるということが出来る。

このような進路指導の意義・目的を学校教育の中でどのように達成すべきかについては、平成元年改訂の学習指導要領でみる事が出来る。

- ・「総則」では、学校の教育活動全体を通じて個々の生徒の特性等の的確な把握に努め、その伸長を図り、生徒に適切な各教科・科目や類型を選択させるように指導すること、および生徒が自らの在り方生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう計画的・組織的に進路指導を行うことを明記。
- ・「特別活動」では、望ましい集団活動を通して心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてより良い生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め自己を生かす能力を養うことを強調。
- ・「ホームルーム活動と進路指導」では、人間としての在り方生き方に関する指導の中心となるものはホームルーム活動であることを明確にし、具体的な活動内容として、
 - ホ - ムル - ム活動における集団生活の充実と向上に関すること
 - 個人及び社会の一員としての在り方生き方に関すること
 - 自己の個性の理解、教科・科目の適切な選択など
 - 将来の生き方と進路の選択決定に関すること
 - 進路適性の理解、進路情報の理解と活用、望ましい職業観の形成、将来の生活の設計、適切な進路の選択決定、進路先への適応などを提示した。

さらに、ホ - ムル - ム活動は進路指導にとって特設された指導の「場」であり「時間」であって、教育活動全体を通じて行う進路指導の中核となること、そして、ホ - ムル - ム活動での「集団指導」と進路相談による「個別指導」の並行的活用により、教育活動全体を通じて行う進路指導の理念を実現することが可能になるとしている。

- ・「学校行事と進路指導」では、特別活動の内容の一つである学校行事の中に、「勤労生産・奉仕的行事」が新設された。このことは職業観の形成や進路の選択決定に資する体験を目的とするもので、将来の生き方にかかわる広い意味での進路指導そのものであると解することができる。

(3) 指導援助の実践

実践に関する基本的考え方として、学校進路指導の意義・目的の達成には、次の点についての配慮に基づく指導援助の実践が必要である。

a. 生徒のキャリア発達を促進する

キャリア発達の過程は、

進路への自覚・関心の高揚、 進路の探索、 進路の特殊化・具体化

進路の集中準備、 進路の選択決定、 進路への適応・自己実現

という段階を経て進むことになる。

中学・高校における進路指導では、特に ～ に重点をおく必要がある。そのためには、個々の生徒に、 個性への自覚を高める、 個性の伸長・開発を図る、 個性と進路の関係を考える、 教育

・職業について学ぶ、自己理解を深める、将来の展望を明確化する、暫定的な進路の現実吟味を反復する、勤労と学習の経験を深める、職業観の確立を図る等のキャリア発達課題の達成を促す指導援助が不可欠である。さらに個々の生徒が望ましいキャリア発達を遂げていくためには、中学校と高校の連携に基づく一貫した進路指導が必要である。

b. 計画的・継続的に指導援助する

個々の生徒がキャリア発達を遂げていく過程は、一般にかなり長期間にわたる。自分ができること、本当にやりたいこと、多くの満足や誇りを持つことは何か、といった課題については日常の学習・経験を通じて、発達段階に応じて達成しつつ成長している。従って生徒の発達段階や個々の生徒の発達上の実態を把握する必要がある。またキャリア発達は長期にわたって累積的に育成されるものであることを認識して、各学年や個々の生徒の実態に即した指導計画をたてた指導援助が大切である。そのために、Plan（計画）- Do（指導の展開）- See（確認、評価）の過程をふんで実践することになるが、実際にはさらに、判断 - 決断 の過程が重要である。

c. 教育活動全体を通じて指導援助する

進路指導が生徒の将来の生き方にかかわる指導であることから、進路指導は、生徒の全人格的発達を促し、その結果として進路の選択決定に至るように指導援助しなければならない。そのためには、常に個々の生徒について全人格的な生徒理解を心掛け、そのフィードバックによって生徒が自己理解をし、将来の生き方を探索し、明確化し、そこでの自己実現が図れるための能力を伸長・開発する必要がある。生徒のキャリア発達は、性格や行動の広範な側面（能力・適性等）の発達を基盤とするから、教育活動全体を通じての進路指導の推進には、ホ - ムル - ム活動・学校行事・クラブ活動などを含む特別活動での指導とともに、各教科を通じての指導援助がきわめて重要である。

d. 全教職員による指導体制

進路指導は、学校の教育活動全体を通じて実施されるべき活動であるから、一部の教師の仕事でなく、校内の全教職の共通理解と協力的指導体制のもとで実践される必要がある。

e. 家庭・関係諸機関と連携する

進路指導は、学校内だけで行われる活動ではない。生徒の家庭や地域社会、関係諸機関との間に直接・間接のかかわりを持つ活動であるから、平素から、学校 - 家庭間の理解と連携を深めるとともに、高校 - 中学・大学・職業斡旋機関・事業所・研究団体などとの連携を図る必要がある。

この時期の進路指導の教育方針としては、おおむね以上の内容が重要視され、現在のキャリア教育が目指すところもかなり含まれている。このようにこれからの進路指導において大切にすべき方向性は確立されたが、学校においては、依然として従来からの出口指導中心の進路指導を改善していくことは容易ではなかった。

（４） 演習を取り入れた進路指導研修講座

生徒の進路を決定していくのは、生徒自身である。しかし、生徒の意志決定を援助するために、教師による多くの実践活動が必要である。生徒に対するもの、保護者に対するもの、学校側に関するもの、中学校との連携に関するもの、広く外部に対するものなど大変多岐にわたる。これらの課題について教師として深めていくためには、教師自らが先ず体験してみることで多くの気づきが生じ、そのことが進路指導実践においても大きな力になるのであって、研修講座をそのきっかけにして欲しいと考えていた。その当時、方法としては次のようなものを考え、それぞれ演習として実施した。いずれにおいても、受講の先生方には熱心に取り組んでいただいた。中・高合同で実施した研修講座であったので、中学校、高等学校お互いの情報交換もでき、それぞれ進路指導教育についての理解も深まっていった。

a. 進路指導実践のための方法（高等学校）

種 類	備 考	形 式
進路相談 ガイダンス	カウンセリング	生徒の選択、決定を援助 【演習】
グル-ブ ワ-ク	自由討議法	創造性、自発性 【演習】
	パネル・ディスカッション	問題意識、解決への行動 【演習】
	シンポジウム	テ-マの問題点、相違点 【演習】
	バズ・セッション	実感的理解を深める 【演習】
	プレ-ンスト-ミング	発想力を養う 【演習】
	KJ法	チ-ムワ-ク作り 【演習】
	ケ-ススタディ	自己理解、他者理解 【演習】
	ロ-ルプレイング	自己理解、他者理解 【演習】
情報提供	各種資料	生徒の選択、決定を援助 【話題】
	I T	F F - N E T 【話題】
	ビデオ教材	進路学習 【提示】
テ ス ト	客観的自己理解を深める 【提示】	
調 査	生徒の現状把握 【話題】	
講 話	多数の人に多くのことを 確実に伝える 【実施】	

b. 演習例 1

シンポジウム 「生徒が生き生きとする進路指導をどう進めるか」
 (シンポジウムの進め方)
 1) グル-ブ討議 14 : 10 ~ 14 : 35
 2) 討議内容の発表 14 : 40 ~ 14 : 55
 3) 全体討議 15 : 00 ~ 15 : 55
 (グル-ブ討議のテーマ)
 A グル-ブ 多様化に対応する進路指導 (高校)
 B グル-ブ 適性や個性に即した生き方を重視した進路指導 (中高)
 C グル-ブ 就職指導への取り組み (高校)
 D グル-ブ 親の立場、親への対応 (中高)
 E グル-ブ 進学指導への取り組み (高校)
 F グル-ブ 現実の進路指導への取り組み (中学)

c. 演習例 2

テ-マ 「私の考える進路指導とは」「私の進路指導方針」
 形 式 グル-ブ討議
 対 象 学年会、進路指導部、気のあった同僚のグル-ブなど。
 個人確認 テ-マについて各自考えをまとめる。メモ用紙準備。
 小グル-ブ編成 8人でお互い向き合う。
 グル-ブ討議 グル-ブ内で自分の考えを、お互いに発表しあいながら、メンバ-の考えを批判したり、非難したりしないで、相手の考えを理解することにつとめる。
 全体発表 グル-ブリ-ダ-が発表
 ねらい他：
 ・進路指導と一口にいっても、各人で捉え方が微妙に違うことを実感する。
 ・相手の考えを批判するのでなく理解し、自分もきちんと相手に理解してもらえるように話すという進路相談の根幹となる部分の難しさを体験する。
 ・自分自身の進路指導観の再構築。
 ・この研修を経験した後、LHRで他のテ-マを設定して、生徒に実施してみると、今までと違った指導が出来る。(資料 VTR「進路学習」)
 ・いくつものグル-ブ編成ができないときは、気のあった同僚と数人で実施したり、一人で実施してみる。(このときは KJ法 などが有効)

2 学校カウンセリングと進路指導教育

この時期は課の業務も大きく変化した時代で、研修講座、研究、研究物刊行、教育相談業務を中心に、学校との連携を積極的に取り入れた活動を目指した。学校カウンセリングを援助するために、コンサルテーション活動の実践、教育相談活動の援助、開発的教育相談の支援を行った。さらに、「教師のための教育相談Q & A ポケット」などを作成し、各学校に教育相談資料として配布した。1990年（平成2年）からは新たにパイロット事業として不登校児童生徒を対象とした適応指導教室「フレンド学級」事業を、また新しくスタートした学級・学校・家庭適応度調査「マイライフ」事業をさらに拡大実施した。この二つの大きな事業は、進路指導教育と大きな関連があり、常に意識して実践にあたった。

（1）学校カウンセリング活動の必要性和キャリア・カウンセリング

教育研究所においてカウンセリング活動を行う過程で、様々な理由で悩み、不登校になったり、挫折したり反社会的な行動に走ったり、家族や学校からも見放されるような経験をしている多くの子どもたちと出会ってきた。また、学校の先生方や保護者の方々と出会ってきた。この出会いを通して学校カウンセリングの必要性を次第に強く感じるようになっていった。学校カウンセリングの中核は、育てるカウンセリングであると考えている。日本のカウンセリング界にロジャーズ理論が風靡したので、学校教育の中でも「カウンセリングとはすなわち心理療法である」というイメージが普及していったのではないだろうか。ロジャーズはカウンセリングと心理療法を識別しなかったのである。このことが、日本の学校教育にカウンセリングが定着しなかった理由ではないかと思っている。学校は社会化センターであって、治療センターではない。心理療法は病理的な人が主たる対象であるが、カウンセリングは問題をかかえた健常者が主たる対象である。学校は原則として健常者集団であるから、心理療法よりも、健常者の成長を援助する、つまり Cure より Care するカウンセリングの方が必要とされているのである。カウンセリングのなかでも治療的カウンセリング（例 不登校、いじめ、勉強ざらい）と開発的カウンセリング（例 進路相談、キャリア・ガイダンス、学級の間人間関係づくり）にわけた場合、治療的カウンセリングは専門機関との連携が必須となる分野であって、これから学校で推進していく学校カウンセリングは開発的カウンセリング（育てるカウンセリング）の方法を次々と提唱していく必要があり、治療よりも予防的・開発的教育であると考えてようになっていった。

人には未来という時間があるからこそ、不安や悩みなどが生じて、そのことが時には心理的に落ち込む状態を誘発する。しかし本当は将来に希望を持ちたいと考えているのだということを、私はカウンセリングを通して学んだ。本当は前向きに色々考えたい、しかしどうしていいかわからないし、誰も自分には関心を持ってくれないと思ってしまうのである。自分のことを考えてくれる人は誰もいないという孤独感にさいなまれ、意欲が減退し、それが学習意欲にも影響していく。人は誰でも自分の未来に関心があり、関心があるからこそ夢を持てるのである。だからこそ、カウンセリングにおいては、未来を視野に入れながらも、今、目の前の問題や課題に取り組むことを重視するのである。子どもたちには、寄り添いながら時間をかけて眼前の問題に対処する力を育み、一人一人が社会で自立的に生きられるような支援が必要なのである。教育研究所で行う様々なカウンセリング活動において、進路指導にかかわる相談は多く、学校におけるキャリア・カウンセリングの必要性を強く感じていた。また、学校不適応の問題にかかわることが多く、児童生徒が生き生きとした学校生活を送るためには、人間関係の問題もさることながら、学校生活で非常に大きな部分を占める授業をはじめとした学習活動が大きく関与することをあらためて認識することになる。学習意欲の低下をもたらす要因として、日々の授業の在り方を見直す必要性を深く考えるようになった。「豊かな人間性」「確かな学力」「燃える希望」を育む教育を目指すことは私のテーマであったので、学校とは異なる教育研究機関ではあるが、いくつかの事業においてこのテーマを念頭に置き取り組もうと考えていた。一言で言えば、一人一人の「意欲喚起」という永遠のテーマになってくる。

このように考えたとき、私は育てるカウンセリングとして四つのことを大切にしていこうと考えていた。一つはキャリア・カウンセリングである。キャリアづくりの援助とは人生計画の援助、すなわち生き方の教育である。第二は構成的グループエンカウンターである。これは、学級や集団のまとまりをよくするため、生徒の自己肯定感を高めるため、思いやりを高めるため、進路意識を高めるため、教員研修への意欲を高めるため、自己理解を深めるため、進路意識を高めるなどいくつかの使い方が考えられる。ロジャーズはグループエンカウンターを20世紀に人間が開発した最高の人間工学と讃美している。第三は、授業に生かすカウンセリングである。「たださえ忙しいのに、この上カウンセリングをする時間などない」という意見は、心理療法的カウンセリングにおける一対一の面接療法を連想するから生じてくるのであって、従来の仕事の中にカウンセリングを応用すればよい。たとえば教科指導への応用、意欲をどう高めるか、自己表現力をどう促進するか、思考力をどうして養うか、グループでの話し合いはどのような時に有効か、討論の話題は何が良いかなどの問いに答えるのにカウンセリングの知識は大きなヒントになる。第四はサイコエデュケーションで、生徒にメンタルヘルス、キャリア、自他理解、友人関係、人間関係づくり、コミュニケーションなどについて心理学的な見方を教育することである。方法としては、本や参考資料の利用、レクチャー方式、実習を伴うワークショップ方式、あるいはプレゼンテーションをもとにグループでの語り合いなどは有効である。課の業務においては機会あるごとに、育てるカウンセリングとして学校カウンセリングの重要性を話題にし、研修講座、教育相談事業、フレンド学級事業、マイライフ事業などにおいて、同僚と協議しながらプログラムにもいたるところに取り入れることができた。この取り組みにおいて、私自身学ぶことが本当に多くあった。これらの体験から、学校における進路指導教育について徐々に自分の中では方向性が見えてきた。それは中・高校における進路指導教育から、小・中・高さらには大学以降に繋がるキャリア教育（career education）への拡張である。「いつか成人して責任感を持って社会へ出る段階に達したとき、一人の社会人として、精神的、情緒的、社会的に自立し、その結果として経済的自立ができる子どもを育てること」の大切さを重く感じるようになってきた。私にとって、長年取り組んできた進路指導教育と教育研究所での学びは、学校教育においてキャリア教育（Career Education）への拡張を示唆するものとなった。

（2） 治療的カウンセリング・開発的カウンセリングと教師の力量形成

教育研究所は教育研究機関であるので、教育相談課が担当する教育相談関係業務においては、スタッフ全員が治療的カウンセリングにも従事する。この全員がかかわる教育臨床の体験は、教師の力量形成上大変重要であると考えている。そして、教育関係機関に勤務する教員は限られてはいるが、ここでの貴重な経験を何らかの形で学校等へ発信・還元するということは、大きなミッションである。従って、教育研究所は「教育臨床の場」であるという認識が重要で、その方向性を間違えると、ただ「教育相談をする」「児童生徒をあずかる」「事業を行う」「教員対象の研修講座をする」・・・などになってしまい、教育研究所としての方向性がずれてしまうのではないだろうか。このことはいつも感じることであって、あらゆる業務に自らかかわることが、教師の力量形成上最も大切なことであると確信している。この当時教育相談課が取り組んだ治療的カウンセリングと開発的カウンセリングの例をそれぞれ概略のみ記す。どちらも進路指導教育・キャリア教育と深く関連するものである。

a. 適応指導教室「フレンド学級」 治療的カウンセリング

不登校（教育研究所では平成10年度までは登校拒否という用語を用いた）児童生徒が増加傾向にあり、その支援事業がパイロット事業としてスタートした。不登校相談にきている児童生徒を対象に、仲間づくりや学習への不安の解消のため、集団適応指導を中心としたフレンド学級を実施し、生活適応や社会適応のプログラムを通して児童生徒の学校復帰を図ることを目的とするもので、現在も継続して実施されている。実施場所は、福井県教育研究所と隣接する福井県立青少年センターで、対象者は小学生（3～6年）と中学生である。学級活動は原則として月・木曜日の9：30～14：30に

行い、第1学期（5月～8月末）、第2学期（10月～1月初）、第3学期（2月～3月末）それぞれにおいて入級式、修了式を行い、9月、1月、4月をチャレンジ期間として学校にチャレンジする時期を設けている。指導内容の主なものとしては、 集団適応指導、 個別カウンセリング、 親への指導援助、 学校との連携である。

この学級の諸活動において、その基本姿勢は現在のキャリア教育と同じくするものである。小学生・中学生の段階でそれぞれが抱える不安から活力が低下している時期に、特別にプログラムされた一人一人を大切に作る集団活動と人間関係を通して、子どもたちが次の社会へステップアップを目指す取り組みは非常に得難いもので、スタッフ全員が全力で取り組んだ。不登校の状況になると、本人はもとより保護者にとっても、教師にとっても、将来の不安は計り知れないものがある。当面、中学校以後をどう進むかは本当に喫緊の課題になる。最初高校受験すら考えられなかった生徒が、受験にも行くことができそして見事定時制高校に合格した喜びの顔は今も心に残る。彼の父親はこの喜びを、「軽トラックにマイクとスピーカを積んで、合格したことを周囲の皆に伝えたいくらい嬉しい！」と表現した。彼は料理人になるという夢をもち、また新たな一歩を踏み出すことになり、スタッフ全員一緒に心から万歳をしてこの合格を祝った。スタッフ全員がこの活動に参加することに、大きな意義がある。プログラムはかなり先駆的なメニューで実施することができたという点で、今思うとキャリア教育の内容を先駆けて取り組んでいたのではないかと、その当時のスタッフと振り返っている。この密度の濃いかかわりは、スタッフそれぞれの、教師としての成長に非常に大きなものとなっていると確信できる。適応指導教室「フレンド学級」の活動は、毎年小冊子にまとめて、各学校に届けた。

b. 学級・学校・家庭適応度調査「マイライフ」 開発的カウンセリング

教育研究所では限られた学年において毎年継続的に学力調査を実施していたが、児童生徒の学習意欲の調査も併せて行うことが重要であることから、学年を特定し抽出して実施した学習意欲度諸要因調査が原点である。平成2年度から開発的カウンセリングに利用できるように全面改良に着手し、平成4年度から新しいマイライフがスタートした。毎年約10,000人の児童生徒の指導援助に利用するため、大量のデータ処理が可能ないようにマークシート方式を採用し、コンピュータによる処理プログラムも作成し改良を重ねていった。小学校4・5・6年生、中学校1・2・3年生、高等学校1・2・3年生を対象としたもので、小学中学生用と高等学校用の二種類作成して、実施していった。

調 査 項 目

< 第一部 >				< 第二部 >			
学	習	意	欲	自	立	性	
学	級	・	学	思	い	や	り
学	級	・	学	校	適	応	感
学	級	・	学	登	校	意	欲
家	庭	適	応	信	頼	者	の
家	庭	適	応	信	頼	者	の
親	の	養	育	学	習	意	欲
親	の	養	育	学	習	意	欲
自	己	抑	制	家	庭	生	活
自	己	抑	制	家	庭	生	活
自	己	肯	定	欲	求	耐	性
自	己	肯	定	欲	求	耐	性
社	会	適	応	自	己	管	理
社	会	適	応	自	己	管	理
登	校	意	欲	自	己	管	理
登	校	意	欲	自	己	管	理
(60問)				(16問)			
小学校約45分				中学校・高等学校約40分			

利用方法手引き書・事例集を作成し、実施結果報告を毎年刊行して各学校に配布した。さらにコンサルテーション活動、研修会実施などを通して、児童生徒が生き生きとした学校生活をおくるための開発的カウンセリングの支援活動の一助として事業拡大を図った。この事業は、学校カウンセリング活動を展開する際の学校との大きな媒体として、開発的カウンセリングの手がかりとして、多くの学校に理解と支持をいただきながら教育相談課の総力を挙げて行ってきた。児童生徒が意欲を持って毎日元気に学校生活を送ることは、教師の共通の願いである。児童生徒との信頼関係を構築しつつ、この意欲という「燃える希望」に繋がる大きな課題に取り組むことは、進路指導教育・キャリア教育が目指す教育のベースである。その一助となればという願いで、この事業は継続されてきた。しかし、1998

年（平成 10 年）をもってスクラップ事業の対象になってしまった。これまで蓄積してきたもの、蓄積してきたデータ、蓄積してきた信頼関係が事業とともにスクラップされてしまうということに断腸の思いであった。責任ある立場にあるものとして、関係者にお詫びの言葉も見つからなかった。この出来事は、学校教育の中での諸事業は、目標を明確に、何のために行うかの議論をしっかりと尽くさなくては、本当に大切なものを失ってしまうことにもなりかねないという思いを強く感じさせるものであった。私にとっては、非常に悲しくもあり、残念な出来事であったが、このことは私自身への箴言として以後心に留めるものとなった。現在でも、私はこの事業は時代にあった形で復活してほしいと願っている。

キャリア教育

1 進路指導からキャリア教育へ

昭和 30 年代に、「職業指導」という呼称が「進路指導」に変わり、昭和 50 年代にはスーパー（D・E・Super）の職業的発達理論・自己実現理論の定義を取り込み、「将来の生き方」とか「将来の展望」という表現を入れ、進路選択よりもキャリア発達の考え方が明確に示されるようになってきた。また、進路指導の究極の目標を「社会的・職業的自己実現」とし、そのための直接的な目標を「自己指導能力の伸長」としている。方向性としての一つはガイダンスからカウンセリングへの発展であり、もう一つは人と職務のマッチングからキャリア発達への発展で、ガイダンスとマッチングは、カウンセリングとキャリア発達の中に統合された形になってきた。言い換えれば、学校における進路指導とは、生徒の広義のキャリア発達の促進活動という面が強くなってきた。このキャリアとは、ライフ・キャリアということで、その人の「生き方の指導」である。1996 年（平成 8 年）中央教育審議会は「21 世紀を展望したわが国の教育の在り方」（第 1 次）答申において、「ゆとり」の中で子どもたちが「生きる力」を育むことの重要性を指摘した。「キャリア教育」という文言が初めて登場したのは、1999 年（平成 11 年）文部科学行政関連の審議会報告等においてで、「生きる力を育む」教育としての進路指導の一層の充実が期待されることになっていった。その後、国立教育政策研究所、文部科学省それぞれの調査研究及び 2003 年（平成 15 年）の「若者自立・挑戦プラン」の策定が行われ、キャリア教育は「若者自立・挑戦プラン」の初等中等教育におけるプランに位置づけられた。そして、キャリア教育(Career Education)の時代ともいえる状況が、2004 年（平成 16 年）「キャリア教育元年」から現在に至っている。

キャリア教育が求められるようになった社会背景としては、一般的には、新規学校卒業者の進路状況の変化と早期離転職、若年失業者及び無業者いわゆるニートの増加、フリーターの増加、就職難、若者のモラトリアム傾向、学校から社会・職業への移行の課題、不登校・高校中途退学など学校不適応の問題、新規学卒者の一括大量採用・年功序列・終身雇用など従来型の雇用形態の崩壊、環境の激変に対応できない学校教育などがあげられる。従来の進路指導では、ややもすると進学・就職の出口指導、配置指導に陥り、キャリア発達課題の達成を支援する系統的な指導・援助といった意識や観点が希薄で、全体として脈絡や関連性に乏しく、多様な活動の寄せ集めになりがちで、生徒の内面の変容や能力・態度の向上などに結びつかないところが見られた。そこで、キャリア教育の特徴として、生き方の一環としての職業について学ぶ教育、主体的に進路を選択する能力や態度を育てる教育、体験的な学習やガイダンス・カウンセリング機能を重視する教育、教科間の連携や家庭・地域との連携・協力、小学校段階から発段階にに応じて実施することがあげられるようになってきた。

以降 2006 年（平成 18 年）～ 2011 年（平成 23 年）においてはキャリア教育推進施策が次々と展開され、報告書・手引書・パンフレット等が出された。2011 年（平成 23 年）11 月には「キャリア教育を創る」「高等学校キャリア教育の手引き」が出版され、その内容は学校教育全般を包括するもの

になってきた。そして、初等中等学校教育のみならず、高等教育においてもこのキャリア教育の重要性と具体的な取り組みが展開されている。

2 アウトプットとリーダーシップ

（1）高等学校教育において直面していた課題と取り組み

長い教育研究所勤務から再び1999年（平成11年）に学校勤務となり、新たな気持ちで責務を果たしていこうとスタートした。1校の教頭、2校の校長を拝命し、公立学校退職まで6年間は、多くの方々に支えられて、これまでの自分をアウトプットする立場でありながら、一方では新たな学びの大切さを痛感するもので、大変短く感じるほど密度の濃い凝縮されたものであった。学校完全週5日制が施行され、最後となった2004年（平成16年）度に、1980年（昭和55年）度から続いてきたF・K学校群が解消し普通科および理数科の通学区域が撤廃され、全県一学区のもとでの新入生の受け入れという大きな変革があった。学校においては、「確かな学力の向上」「豊かな心の育成」「信頼される学校づくり」は大きなキーワードであった。「確かな学力の向上」の問題では、「知識技能」と「意欲能力」の二者択一の議論ではなく、バランスよくこの二つの力をつけていくこと、「豊かな心の育成」の問題では、命の教育を中心に据え心のスキップやコミュニケーションをとおして体験不足を補い生きる力を育てていくこと、「信頼される学校づくり」では、危機管理の第一は法令遵守(compliance)であることを認識し危機が起きた時の情報の共有を速やかに図る備えが、教職員の共通理解として重要であった。さらに、マネジメントにおいては、社会に対しての説明責任(accountability)と情報公開、さらに教職員の意見を尊重した学校運営などには特に気を配った。また、学校評価については、次の世代の人材を育成するためには、生徒の知識のみでなく能力をスキルアップする教師の力量が不可欠で、この力量を高めることが学校全体の教育力を高め、学校の信頼に繋がっていくことを強く感じていた。この当時学校が抱える課題は、学力向上の問題、学校週5日制に伴う授業時間数確保の問題、指導力向上の問題、全県一学区のもとでの広報と生徒確保の問題、部活動指導の問題、大学入試センター試験対策と進学指導の問題、就職支援の問題、各学校の特色づくり、特別支援教育諸学校の抱える問題、入試改善の問題、教員研修の問題、教職員の不祥事、教職員の服務規律の問題、危機管理の問題、補習実施に伴う問題、土曜日の活動と勤務の問題、生徒徴収金取り扱いの問題、税務の問題など山積していた。県の施策で、学力向上支援事業、高校生就職支援事業、学校冷房化支援、福井型の中高一貫教育の推進も進められてきた。さらに、週休日の教職員の教育活動等に係る服務、高等学校卒業程度認定試験、経済関係団体への採用拡大の要求活動、土曜日等の補習手当等についての申し合わせ事項の検討などもなされた。経済同友会の呼びかけで、高等学校校長会との合同研修会を立ち上げて実施したのもこの時期である。「働くことが楽しくなる『社会人として大切なこと』」をテーマに、講演・グループ討議・全体会議をとおして有意義な懇談会を持った。現在は高等学校教頭会との合同研修会に形を変えたが、学校と企業が連携し職業観や社会性を養うキャリア教育を推進することを確認する研修会として存続している。

私が所属する学校だけでなく、福井県の高校生の活躍は、文武両面において目を見張るものがあり、特にこの6年間はあらゆる場面で感じ、頼もしく思うことが多かった。

2003年（平成15年）の全国高等学校総合文化祭は、台風接近という厳しい状況の中福井県で開催したが、あらためて高校生の活躍とそのエネルギーを目の当たりにして感動した。県内においても、高体連・高野連・高教研・高文連における高校生の活躍は、多方面に渡り実に素晴らしいものである。平成16年7月の突然の福井豪雨においては、高校生の復旧ボランティア活動は実に大きな力を発揮した。ボランティアに限らず、多くの学校が一体となった取り組みは、瞬く間に、生徒・教職員はもとより、保護者や社会をも取り込みとてつもなく大きな力になっていった。これらのことを目の当たりにし、あらためて「子どもたちは宝である」ことを強く感じた。

この6年間は、私にとってこれまでの教育と研究の総決算としてアウトプットの時期で、極めて多

忙であった。学校運営・経営を進める中で、教職員や関係の方々の子どもたちの教育に対する温かさやその力の大きさを身にしみて感じる日々であった。管理職という立場での教育と研究は更に重いもので、リーダーシップを自覚したしっかりした研鑽が必要であることを痛感した。

(2) 高等学校教育の大きな関門である進路指導

私は、この時期においてさらに進路指導教育の大切さを思い、「進路指導は高等学校教育の大きな関門である」の意を強くし、この6年間、生徒のための進路指導教育の重要性をこれまでの経験をもとに強調してきた。その内容は、中学校・高等学校における進路指導教育を拡張したキャリア教育を意識したものであった。この時期、産業界ではキャリア教育という言葉は用いられていたが、学校教育ではまだキャリア教育という言葉は一般的でなかったので私も敢えて使用しなかった。学校教育の場でキャリア教育が正式に登場したのは、いわゆる「キャリア教育元年」の2004年(平成16年)であるから、私が公立学校勤務最後の年であった。生徒の進路学習を支援し進路指導の充実を図るため、多方面から講師の方々の理解協力のもと、「職業発見講座」「大学発見講座」「学問発見講座」「進路先の見学・体験」などが活発に行われるようになった。この活動は、大学側の積極的な協力もあって、大学をはじめ外部社会との連携が深まり、キャリア教育の目指すところでもあった。

教頭・校長は、立場上様々な場面で発信する機会は非常に多い。話をする場合でも、数百人とか千人を超すような多数を対象にする場合や、百人とか数十人とかを対象にする場合や、同じ集団で毎日、毎週の定例的なものであったり、あるいは会議や委員会などであったりする。文章や言葉で発する時の源泉は、やはりこれまで見聞きしてきたこと、体験してきたこと、感じたり感動したこと、反省したり学んだこと・・・のように教師として歩んできた様々な自分自身が蓄積してきたものである。私の場合は、ずっと継続してきた知的生産に関する大量のデータベース、すなわちメモ、ノート、カード、オープンファイル、PC データ・・・などの情報整理である。そのストックしてきたものを手がかりに将来を見据えてポイントを絞っていくことになる。しかし、自分の思いをどう伝えるかとなると、対象によっても内容によっても雰囲気によっても異なり、いかなる場合でもこの作業は非才な故に頭を悩ますことであった。進路指導教育・キャリア教育に関することも、式辞、月頭朝礼、講話、挨拶、挨拶文、巻頭言、大学入学試験の激励、就職試験の激励等で話題を折に触れて取り上げ、生徒や教職員やその他の人に対して思いを伝えてきた。今振り返ると、内容はかなり多岐にわたり、思った以上に多くあることに驚いた。紙面の都合上これら全てをここでは記せないが、常に大切にしてきた「豊かな人間性」、「学ぶ喜び」、「燃える希望」について触れた話の内容を一つだけ記す。

(3) 「豊かな人間性」、「学ぶ喜び」、「燃える希望」

3、40代の社会人対象に、社会で意欲的に活動している人を色々なところから抽出して、高校時代の様子を問うアンケートを実施した結果、そのベスト5は

考え方が未来志向型であった。

家庭が楽しかった。

先生や親から受け容れられた。

手伝いをよくした。

相手を楽しませることがとても楽しいと感じた。

であるということが報告されています。このような人には、「人のおかげで生きてきたから、自分も人のためにお返しする」という心が育ってきているのでしょうか。数年前の時代はこのように感じる体験や場が数多くありました。ところが、皆さんが育ってきた時代は、大人を含めて従来とは違う大きな変化が急激に生じてきた時代です。それは、

豊かな時代の到来により、意欲の減退を生じてきました。

高学歴社会の到来により、益々受験競争を激化させてきました。

都市型社会の到来により、夜型の生活が多くなり戸外での群遊びが減少しました。

情報化社会の到来により、間接体験が増加し、プライバシーの不安感は増しました。

これらのことにより、心地よい人間関係を結んでいくための集団での学習の場が減少してきました。このように個人主体の生活が多くなってきますと、なかなか他人を思いやったり、人の痛みがわかるという体験が不足してきますから人間性が育ってきません。皆さんは、便利で、素晴らしく高度な時代に育っているという一方で、心していないと、ややもすると大事なことを見逃してしまう大変な時代に生きているともいえるのです。これは、大人側の責任でもあるのです。そこで、私は、次の3つのキーワードを提示したいと思います。それは、キーワード1「豊かな人間性」、キーワード2「学ぶ喜び」、キーワード3「燃える希望」です。この3つを、自分自身と照らし合わせて考えてみてください。

（1）キーワード1は「豊かな人間性」です。

今年の2月に、高校生のアメリカ訪問の引率としてアメリカへ行きました。日本以上に車社会で、移動は全部車だったのですが、観光社で働いている日本人の運転手Kさんと話をする機会がありました。Kさんは21歳で単身アメリカへきて、レストランでの皿洗いなど、いろいろな仕事を経験し、それはそれは苦しかった時代があったそうです。10年ほど前から旅行観光社に入り、53歳でやっと少し安定した仕事につけたとおっしゃっていました。このKさんとの話の中で、子どもの頃親を初めいろんな人から言われた「おてんとさまが見ているぞ」という言葉が、崩れそうになる自分を何度も助けてくれたと言われたことが、とても印象的でした。そういえば、日本が経済国として急激に変化した時代から、豊かさに惑わされて、このような言葉をもう使わなくなってしまったような気がします。Kさんは、更に、アメリカの紙幣には「IN GOD WE TRUST（神を信じなさい 神が見ているよ）」と書いてある、このような国は他にありませんよ」と話されました。一番目に触れるお札にこの言葉が書いてあるわけです。日本の「おてんとさまが見ているぞ」とアメリカの「IN GOD WE TRUST 神を信じなさい 神が見ているよ」を対比させ、日本は何かを忘れてしまったのではないかと思いました。戦後アメリカナイズされた部分の多い日本ですが、表の部分、光の部分だけを取り入れるだけでなく、裏の部分、影の部分に十分心を遣わなくては、大変なつげが回ってくるのは必至です。「おてんとさまが見ているぞ」のことは、時代が変わってもずっと継承していかなくてはいけない、不易な部分だと思うからです。その日はとても疲れる行程でしたが、この話を聞いたため、何かとても充実した、さわやかな気分になりました。今の時代、その人が豊かな心をもって、そして何ができるのかということが、その人の大きさを測る大きな要素です。「おてんとさまが見ている」という言葉は、時には自分を励まし、時には自分を厳しく戒め、自分をコントロールする不思議な力を持っています。そして、この言葉を思う心が、人を、「豊かな人間性」を備えた人間へと成長させます。

（2）キーワード2は「学ぶ喜び」です。

私は、大変スポーツが好きなのですが、中でも野球には興味があります。今年は、アメリカの大リーグにおける日本人選手の活躍がクローズアップされていて、どんどんニュースが入ってきます。特に佐々木やイチローの活躍は現在のところ際だっています。本当に立派だと思いますし、思わず応援したくなります。2年ほど前だったと思いますが、NHKがイチローの特別番組を放映したことがありました。その中のインタビューで、イチローの言葉ではっとさせられたことがありまして、今でも覚えています。それは、イチローは、「小さいときから私は野球における英才教育を受けてきました。悪くいえば、野球しかしてこなかったともいえます。しかし、私は、野球の中で、人としてこれまでに学ぶべきことを全部学んでいます」と、自信を持って話しました。このやりとりに、私は、イチローの謙虚さと非凡さを見ました。これは本物だと思ったわけです。イチローのことばを借りれば、「いま取り組んでいることに誠心誠意打ち込むことで、人として学ぶべきことも全部学ぶことができます」ということです。自分の学校を好きになること。自分のホームが好きになること。自分の先生が好き

になること。皆さんの高校生活は、自分を人として、そして来るべき社会人として成長させる、貴重な自分の宇宙です。その中で、是非、謙虚な姿勢で学んでください。謙虚な姿勢で学ぶことができる人こそが、どんどん伸びる人です。是非「学ぶ喜び」を味わってください。

(3) キーワード3は「燃える希望」です。

「学ぶ喜び」は「燃える希望」に繋がります。今からずいぶん前の話になりますが、私が通勤途中、車の中で何気なく聞いたインタビュー番組の中で、今でも心に残っているものがあります。確か、50代のビジネスマンとアナウンサーのやりとりでしたが、アナウンサーに対して、そのビジネスマンは「私は、日々3つのことを心がけて生活をしています。一つは、できるだけ多くの人に会って話をする。二つは、自分の考えを文章で表現して残すこと。三つ目は、自分の考えを多くの人の前で説明したり発表したりすることです。」と話していました。その時は、私は、この3つとも苦手とするところで、「立派な人もいるな」ぐらいで、別に気に止めなかったのですが、20年ほどたった今も何故か妙に心に残っています。よく考えてみますと、これまで私自身が歩んできた道は、どうもこの苦手な3つのことの繰り返しのような気がしているわけです。いま、高校生の学力向上についての方策が議論され、総合的な学力が高校生にも要求されてきています。人は、いくつになっても学ぶことの連続ですが、このビジネスマンが話された3つが、これからの高校教育でも不可欠のものになってきています。そこで、各学年において次のような意識を持ってみては如何でしょうか。それは主に、1年生はinput(入力)の期間、2年生はstore(蓄積)の期間、3年生はoutput(出力)の期間として位置づけるということです。1年生は、新たな気持ちでできるだけinputして、早く高校生としての切り替えをしましょう。これは、できるだけ多くの人に会う(インタビュー)ことにつながります。2年生は、ただinputしたものを蓄積するのではなく、取捨選択して取り出しやすいように整理します。これは、自分の考えを文章で表現する(リテラシー)ことにつながります。3年生は、2年生でstoreしたものをもとに、自分の個性をしっかりと外へ表現することで、大きな目標である進路実現を自分で勝ち取りましょう。ここでは、自分の考えを文章で表現する力や自分の考えを多くの人の前で話す力(プレゼンテーション)をつけることが重要です。

テストなどの点数をアップする学習は勿論重要ですが、これからの時代、この3つのこと、すなわち「インタビューの力」「リテラシーの力」「プレゼンテーションの力」、この能力を身につける学習が、自分を成長させます。この意識により、毎日の、勉強や部活動、そして、学校活動全体が、従来よりも楽しくなってくるでしょう。この力は、自分の進路を実現していくためにも大きな力になります。心をオープンにして、この3つの努力を継続することにより、自分の適性が徐々に理解され、自分の進路が明確になっていきます。高校を卒業すれば、どのような進路に進むにしても、周囲は、社会人として扱います。本校は多くの人が大学をはじめ上級学校に進みますが、その場合も周囲は社会人として扱います。高校3年間の最も大きな目標は、自分自身の進路をどう切り開いていくかです。それは、言い換えれば、自分を「社会人として適用する人間として成長させる」ということです。現在、あらゆるところで活躍している人は、子どもの頃から「燃える希望」をもっていた人物だということは、皆さんも多くの本や情報から知っていることでしょう。是非、それぞれが自分の進路を見据え、「燃える希望」をもって高校生活を進めてください。

以上、皆さんに、3つのキーワード、キーワード1「豊かな人間性」、キーワード2「学ぶ喜び」、キーワード3「燃える希望」を提示しました。是非、このことについて、それぞれが考えてみてください。

3 私立高校におけるキャリア教育

公立学校を退職し、その後縁あってFK大学に勤務することになり、2006年(平成18年)にFK大学附属F高等学校の校長を拝命することになった。今まで見ていなかった私学の教育に身を置くことになり、「建学の精神」のもと教職員の教育に取り組む姿、生徒たちの活動や表情、学園全体の雰

困気などあらゆる面が、私にとって大変新鮮で新たな学びの連続であった。理事長始め学園本部の方針と方向性を尊重しながら、いわゆる学校改革に微力ながら 2009 年（平成 21 年）まで 4 年間かかってきた。この間次の時代を見据え、従来からの多学科多コースを 2 期にわたって再編整備した。第 1 期では、普通科の進学を主体とする柱、工業科と衛生看護科の専門系の柱、業績めざましい芸術・スポーツの柱の三つの柱を掲げ、人、夢を輝かせる学校を目指した。第 2 期ではさらに、探求・創造教育、心・人間教育、スポーツ・文化芸術を 3 つの教育目標に掲げ、学びを主体とした学科・コースに整備した。これらの学校改革は、これまでの F 高等学校の歴史の中でもドラステックなものであったが、この間協働した温かい先生方との出会いは、私にとって本当に大きな財産となった。学校改革の喫緊の課題は、信頼される学校づくりのための文武両面にわたる学校教育力の向上で、生徒・教職員の意欲向上のもとスクール・アイデンティティーをいかに確立していくかであった。近年の物質文明は、想像をはるかに超える変貌を遂げ、人々に、次々と生活の改善を迫り、心理的にも大きな揺さぶりをかけ続けている。生徒たちへの教育も、社会の変化のスピードと教育のリズムの誤差の中で、模索を余儀なくされている。「ゆとり教育」か、「学力向上」かの議論も盛んであるが、目の前にいる子どもたちは、この二十一世紀を遅く生きていかななくてはならない。高度で複雑な変化の激しい現代社会を生き抜くことは、決して容易ではない。時代がどのように変化しようと、学校は、「すべては生徒のために」というキーワードを根底に、教育が追求する「高い知恵」「豊かな感性」「健康な身心」を生徒たちに育む努力をし、不易な教育の姿勢を、繰り返し繰り返し言い続けなくてはならない。学校全体において、ビジョンを共有し、「現在在校生に最高の教育をする」ことが次へ繋がる何よりのものであるという共通認識のもとで教育活動が行われなくてはならない。学校の教育力の向上は、現時点よりさらに教育の質的向上を目指すことであって、それはとりもなおさず日々の授業改善に取り組むことであるといっても過言ではない。このことを実行するには、やはり教職員の意欲をどう引き出すかが必要で、そのためには信頼して責任と権限を与えることが重要である。「生徒はどこでつまづくのか」「丁寧に教えるにはどんな教材が必要で、どのように工夫して与えていったら良いか」などを議論し考える教師集団づくりが大切である。このことは学校のあらゆる教育活動にも波及し、このことによって生徒たちの学習意欲は確実に向上する。実はこれがキャリア教育の目指すところでもあるのである。そして、この地道な取り組みが、教職員の力量を高めることに繋がり、学校の教育力向上に繋がる。このような積み重ねこそが、教育改革のあるべき姿であって、キャリア教育こそがこの学校改革推進の大きなエネルギーになっていくものであると確信していた。

そこで、2007 年（平成 19 年）度、「キャリア教育」の推進を F 高校教育の一つの柱に正式に据えた。F 高等学校の教育改革は、このキャリア教育と共に進んでいくことになる。

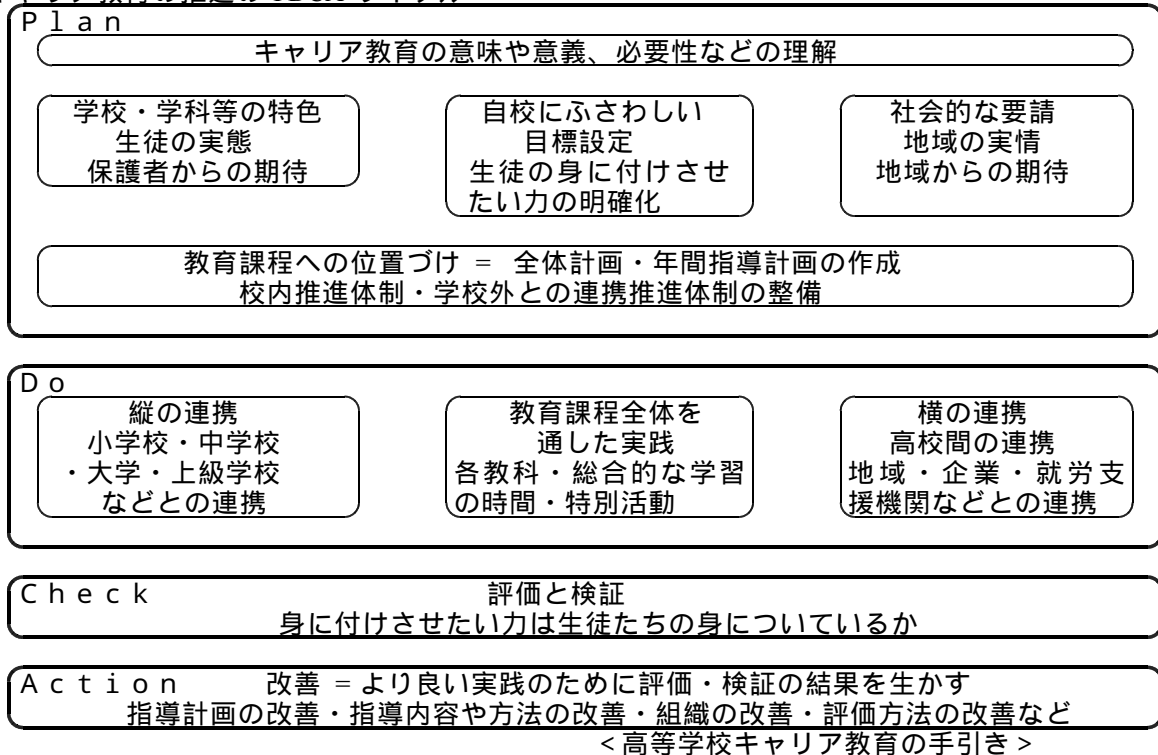
（1） キャリア教育の推進

学科・コースの再編整備と並行して、学校の目指すべき方向すなわちビジョンを明確にし、全教職員の共通理解のもとで学校運営がなされることが理想である。特に多様な学科・コースからなる学校においては、この教職員の共通理解は大きな課題である。この課題克服のために高等学校、専攻科教育のさらに活性化を目指して、プロジェクトチームを中心に教育アクションプラン・教育アクションプログラムを策定した。このプランは教員全員が考えるプランであって、学校が取り組む教育活動のなかで特に重点的に取り組む内容を具体化したもので、生徒のための教育を進めていく指針となるものである。このプランを常に手元に置き、折に触れて進捗状況を確認しながらより良い教育を目指していくものである。このプランによって教職員は自分が所属する以外の分野のねらいや取り組み状況を把握することができ、学校全体の方向性に対して共通理解を持つことができる。新しく「キャリア教育」を統一したテーマとして掲げても、教職員それぞれの受け取り方は様々で、具体的な取り組みについて戸惑いが見られるのも当然である。そこで、このプランの中にキャリア教育の具体的な内容も取り入れ、共通理解を図り推進していった。進路指導は高等学校教育の大きな関門である。これま

で学校のそれぞれの分野で、進学とか就職とかに生徒の希望を満たしたいいわゆる出口指導などに独自に全力を注いできた。特別進学コースでの大学受験指導や資格取得のための指導なども徹底して行ってきた。勿論これも進路指導であり、この経験蓄積も大切なものである。しかし、これからのビジョンを見据えれば、このように取り組んできたこれまでの進路指導を振り返りこれからの進路指導をさらに充実させるために、従来の進学指導体制を変換して学校全体をカバーした進路支援システムを構築することが必要であった。学校組織において、キャリア教育の推進を念頭に、キャリア教育課と進学指導課を新設した。さらに、核になる学習センター、キャリアセンターの機能を有した進学指導センターを開設し、進学指導センター長を置いた。1年次から「キャリア教育」を進めるため、各学年会と連携しキャリア・カウンセリングも導入しながら、生徒一人一人が将来に向けて進路ストーリーを描けるような指導を展開していく。進路実現に向け、大学受験を克服するために強靱な学力をつけることや、より高い資格取得を目指して特別補習も充実させていくなど具体的な取り組みを出されていった。キャリア教育は、生徒たちが社会に目を向け将来に向けて働く意味を理解し、職業観、勤労観や、職業に対する知識、技能を身につけ、自分の能力や個性を理解した上で、目的意識を持って進路実現に向かう力を養っていくものである。従ってキャリア教育を推進するということは、何か特別なことをする教育活動ではない。これまで取り組んできた様々なことを今一度見直し、生徒が社会でたくましく生きていける力をつけるために、高等学校教育で可能なことをできる限り取り組んでいこうという教育運動である。この観点に立ち、日々の授業や学校生活のあらゆる教育活動は、キャリア教育を意識することで、その取り組みが深化していくことからスタートすることになった。在校生に最高の教育をすることが、キャリア教育に繋がる何よりのもので、これを合い言葉に「生徒の夢実現」のために学校をあげて取り組むという姿勢が、やがて学校全体に波及していくことを目指した。

推進にあたっては概ね次のPDCAサイクルに準じている。

キャリア教育の推進のPDCAサイクル



(2) キャリア教育の意味や意義、必要性などの理解

a. キャリアの意味

キャリア教育は、職業教育とか職業体験と混同されることが多い。これは「キャリア」という言葉

に起因すると考えられる。学校においてキャリア教育に取り組むためには、キャリア教育の定義と目標を理解することは必須であるが、そのためには「キャリア」という言葉の意味を正確に把握することが大切である。「キャリア」という言葉は日本社会において、職業、専門的職業、職業経歴などの意味においてごく普通に使用されている。また、キャリアアップという和製英語に象徴されるように上昇志向の職業生活のイメージから、エリート官僚、キャリアウーマンなどに代表されるような専門分野を持ち職業を生活の中心とした生き方を指す言葉として用いられることも多い。1970 以降アメリカを中心にキャリアについての研究が飛躍的に進み、キャリアについての見解も様々出されたが、共通しているのは「個人が、仕事や職業とかがかわることを通して築いてきた個人の経験の世界、すなわち働くことを通して築かれてきた個々人の生き様を指している」ということである。例えば、「教師、教職」について考えると、一人一人の教師が、教職という職業を通して築いてきたその人の人生、すなわち職業人生が「キャリア」である。同じ教師という職業についても、職業に対する意味づけや価値づけ、経験した葛藤や対処の仕方、教師としての生き方や展望などはすべて異なる。それぞれが独自の職業生活を築いているし、職業生活だけでなくそれ以外の家庭生活などにおいても相互に影響しあっている。すなわちキャリアは、個人の生活の中から職業生活だけを取り出してその意味を問うのではなく、個々人の全生活の中に位置づけて職業生活の意味づけをする。さらにキャリアは前進するという意味も含んでいて、時間の流れとともに上だけでなく前、横に向かって今よりも先に進み変遷する意味を内包している。渡辺三枝子氏はキャリアに含まれる、時間的な経過という意味、空間的な広がりという意味、個別性という意味という三つの意味を指摘し、この三つの意味を生かしたキャリア教育の推進の必要性を強調している。このような意味づけは、文部科学省の説明にも反映されているものである。

これらのことから、学校教育においてキャリアの捉え方としては、次のように表現できるのではないだろうか。すなわち、人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員など、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、繋がっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」や「学ぶこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである

b. キャリア教育の定義

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書 2004 年（平成 16 年）では、キャリア教育を「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』」と定義し、人間が自立的・主体的に生きるためには、社会的発達促進、社会性の育成は不可欠のものであり、キャリア教育はあらゆる教育活動を通して社会的側面の発達を促していこうとするものであった。しかし、限定付きながら「勤労観、職業観を育てる教育」としたこともあり勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていることが課題として生じていた。そこで、2006 年（平成 18 年）文部科学省「キャリア教育推進の手引き」において、「子どもたちが『生きる力』を身につけ、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人、職業人として自立していくことができるようする教育であり、（中略）学ぶことと生きることを関係づけながら、子どもたちに生きることの尊さを実感させる教育であり、社会的・職業的自立に向けた教育である」とし、

ねらいを明確にした。キャリア教育とは、児童生徒が、将来、社会人・職業人として自立的に生きていくために必要な能力や態度・意欲を段階的に発達させることを目標とする教育改革の理念であるといえる。さらにこの手引き書では、各学校がキャリア教育に取り組む意義を3点に要約している。キャリア教育は、

教育改革の理念であり、方向性を示す考え方である。

一人一人のキャリア発達やこの自立を促す視点から、従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革していくための理念と方向性を示すものである。

生徒たちの発達を支援することを目指す。

キャリアが生徒たちの発達段階やその発達課題の達成と深く関わりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、全人的発達を促す視点で積極的な取り組みを進める。

教育課程の改善を促す。

生徒たちのキャリア発達を支援する観点に立って、各領域の関連する諸活動を体系化し、計画的、組織的に実施することができるよう、学校において教育課程編成の在り方を見直していく。

このことから明らかなように、キャリア教育は全教職員がかかわることによって実現される教育改革である。

c. キャリア教育の目標

キャリア教育の定義から、キャリア教育の目標はいろいろな角度から設定することができる。入学から卒業までを見通した目標設定、キャリア発達を踏まえた目標設定、学校・学科などの特質や、生徒の実態に即した目標設定が、それぞれの学校においてなされなくてはならない。一方では働くことや職業に対する理解の不足や安易な考え方など、若者の勤労観・職業観等の価値観が十分に形成されていないことが指摘されている。従って、キャリア教育の目標として、望ましい勤労観・職業観の確立を除外することはできない。自らの人生の中で「働くこと」にどれだけの重要性や意味を持たせるのかは、最終的に自分で決めることであるが、その決定の際に中心となる勤労観・職業観は、様々な学習や体験を通じて自らが考えていく中で形成・確立される。このようなことを踏まえ、後期中等教育修了までに、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通した能力・態度を身に付けさせることと併せて、これらの育成を通じて価値観、とりわけ勤労観・職業観を自ら形成・確立できる生徒の育成を、キャリア教育の視点から見た場合の目標とすることが必要である。実際学校で行われている進路指導では、生徒の意識の変容や能力や態度の育成に必ずしも十分結びいていないという指摘もある。入学試験や就職試験に合格させるための支援や指導に終始するいわゆる出口指導はその典型であるが、表面的に捉えると出口指導に見えても、実際は生徒の思いを尊重した時間をかけた粘り強い指導として進路指導が行われている現状もある。高校生の段階で自らの将来を設計しても、変化の大きな社会の中では、その後将来設計が変化していくことは当然である。しかし、そのことは高校生の段階で自らの将来のことを考える必要はないということではない。これから数多く経験するであろう人生の岐路を乗り越えるためには、高校生の段階で、自らの将来を真剣に考え、それに必要な情報を取捨選択・集積・分析し、熟慮の上に責任を持った判断をする過程を経験させることが重要である。職業を意識した時期が早いほど、大学への進学理由や将来の目標を明確に持ち、将来の社会での姿を思い描いている傾向がある。従って大学をはじめ上級学校への進学を希望する者が多くいる学校においてもキャリア教育を意識し、全校体制で行う受験指導や受験勉強をも含めた進路指導教育を、キャリア教育の一環として位置づけることは学校改革に繋がる重要な取り組みとなる。F 高校は学科は3学科ではあるがコースは多コースで、多様な目標を必要とする学校である。従って関係の学年会、学科・コース、校務分掌が協議し、目標を横断的に設定し、それぞれ特色ある目標に向かって進めていくことが重要な留意点である。

d. キャリア発達

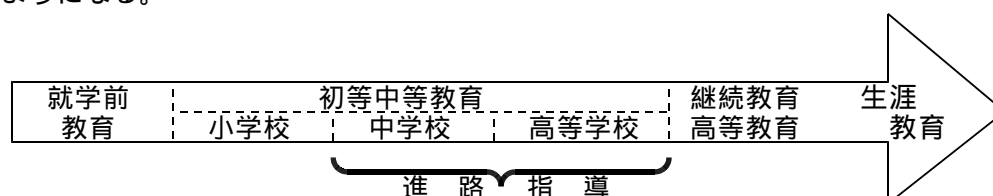
キャリア教育の定義からも明らかなように、キャリア教育の実践に当たってはキャリア発達の視点に立つことは重要である。キャリア発達とは、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程である。教育は、全人格の発達を促す行為であるから、キャリア教育実践のポイントは、学校教育がこのキャリア発達の促進にとって重要な役割を持っているということを理解することである。従って、キャリア発達を促すことを目的としたキャリア教育を実践するに当たって、教師はあらためて自分自身が教育・教師の役割をどのように捉えているのか、発達は自然に起こるものではなく働きかけすなわち教育が不可欠であること、生徒は他者との相互作用の中で生きる力を育むという認識、学校は生徒にとって最も身近な社会であるという認識、生徒にとって働くとは学ぶことと生きることであるという認識を確認することが必要である。F 高校は、大学と中学校が併設しているという大変恵まれた教育環境である。キャリア教育を推進するに当たっては、この恵まれた環境を生かし、大学、中学校との連携が一層貴重である。なぜなら、中学校3年、高校3年、大学4年、大学院2年～4年、学園内の多数の教職員が同じキャンパスにいるという環境は、学校という12年～14年間、そして社会を日常的に間近で接点を持つことになり、このことは自己理解を深め、自らの成長発達を多くのモデルと対比させながらデザインしていくことができることが期待できるからである。

小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達は概略次表のようになる。

就学 前	小学校	中学校	高等学校	大学・専門 学校・社会人
	キャリア発達段階			
	進路の探索・選択にかかわる 基礎形成の時期	現実的探索と暫定的選択の 時期	現実的探索・試行と社会的 移行準備の時期	
	<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的 関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境 への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己の イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向か って努力する態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 肯定的自己理解と自己 有用感の獲得 興味・関心等に基づく 勤労観・職業観の形成 進路計画の立案と暫定 的選択 生き方や進路に関す る現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解の深化と自己 受容 選択基準としての勤労 観・職業観の確立 将来設計の立案と社会的 移行の準備 進路の現実吟味と試行 的参加 	

e. キャリア教育と進路指導の関係

キャリア教育を推進するに当たって、高等学校の進路指導とキャリア教育はどう違うのかという疑問は生じてくる。そもそも進路指導は、本来、生徒の個人資料、進路情報、啓発的経験及び相談を通じて、生徒が自ら、将来の進路を選択・計画し、就職又は進学をして、更にその後の生活によりよく適応し、能力を伸長するように、教師が組織的・継続的に指導・援助する過程であり、どのような人間になり、どう生きていくことが望ましいのかといった長期的展望に立った人間形成を目指す教育活動である。進路指導は、個々の生徒に、自分の将来をどう生きることが喜びであるかを感じ得させなければならないし、生徒各自が納得できる人生の生き方を指導することが大切である。このような進路指導のねらいはキャリア教育のめざすところとほぼ同じである。定義・概念としては、キャリア教育との間に大きな差異は見られず、進路指導の取組はキャリア教育の中核をなすということが出来る。進路指導は、理念・概念やねらいにおいてキャリア教育とほぼ同じものであるので、中学校・高等学校に限定される教育活動であるといえる。このようなキャリア教育と進路指導との関係を図示すると次図のようになる。



(3) キャリア教育の実践

a. Plan 共通理解

次の4つの目標を設定する

基礎学力の定着と向上を目指し、基礎力診断テストなどを実施し、生徒の将来への視野を拡大していく。

読書・講話・キャリア教育関係の情報などを通し、学ぶことによって豊かな心を醸成し、学校生活において落ち着いた心を育む。

デザインノート・ガイドブックを作成配布し、これを利用して将来設計・計画的な人生設計を視野に自己を振り返る。

大学・上級学校・資格試験などへチャレンジする心を養い、達成感と向上心を育む。

これらの目標をもとに、キャリア通信、生徒一人一人のキャリアデザインを支援するオリジナルなキャリアデザインノート、進路指導のための基本事項をまとめたキャリアガイドブックなどを作成配布し、進路指導の補助資料として意識の高揚を図る。特に基礎力診断テストは、「生きる力」の原点となる基礎学力の定着を目指し、教務部と連携し学校全体で各担任の協力を得て実施する。そして、担任にアンケートを実施して浮上した課題や展望を集約して次に生かすことによって、担任や生徒の意識も変化し、このことが納得できる進路選択を可能にし、チャレンジする強い心を育み、やがては知育・徳育・体育のバランスよい人間成長に繋がっていくことになる。さらにキャリア教育についての校内研修を実施すること、キャリア教育の補助資料を利用しやすいように蓄積整備すること、キャリア教育課のリーダーは文部科学省の指導概念がどのようなものかを知るために中央研修「キャリア教育指導者養成研修」に参加し、それを踏まえて伝達講習を校内で実施するなどして、キャリア教育の基盤づくりのプランを設定。以下詳細は紙面の関係で省略する。

b. Do 実践

生徒の意欲を喚起する活動を行う。

基礎力診断テスト実施と活用。

多方面から講師を招き進路講話を毎年実施し、心の教育を実践する。

1年 「夢の実現」と「積極的生き方」

2年 「自分は将来どうなりたいか」

3年 「職業と生き甲斐について」

ジュニアインターンシップを実施し、職業意識の向上を図る。

資料、補助教材を提示する。(生徒用、教師用のデータベースを充実させる)

環境を整備する。進学指導センター。キャリアカウンセリング室。

キャリア教育校内研修会の実施する。外部講師による研修会を実施する。

地域との連携、ロータリークラブ、PTAによる講義と模擬面接実施。

地域ボランティア活動、幼稚園、福祉施設での体験学習を行う。

c. Check 点検・検証・評価

校内研修を通して、キャリア教育の理解を深め、グループワークやレポートを作成し、教職員自身のキャリア教育への取り組みを省察する。また、キャリア教育に関するアンケートを実施し、基礎力診断テストに関しては教科担当者との連携し活用を共有化しチェックする。また、キャリアデザインノート、キャリアガイドブックを進路選択指導で活用されているかどうか、使用上困っていることはないかを点検する。図書・視聴覚教材を授業以外に個人的にも活用し利用を促すため、キャリア教育支援教材はリスト作成して提示する。これらはキャリア教育課で保管し、いつでも貸し出し可能にし意欲を喚起していく。これらを総括的に評価し、併せて生徒に対しては、身に付けさせたい力が生徒たちの身につけているかの点検をキャリア・カウンセリングなどを通

して適宜行っていく。

d. Action 改善・ステップアップ PDCAサイクルを重視する。

実施してきた活動を踏まえ、さらにステップアップを図る。基礎力診断テストを、さらに教師と生徒が一体となった意識での取り組みを図る。キャリア教育課と教務部の連携で、教育課程の改善を図る。各教科において、授業改善を図る。図書・視聴覚教材・講演の一層の拡充と活用を図る。外部講師による講話実施については、特に講演者の人生観を重視した人選をする。キャリアデザインノート・ガイドブックの内容を吟味・改訂し、一層の充実を図る。大学進学指導については、キャリア教育の視点に立って、将来を見据えたチャレンジをすることで一層の意欲を喚起していく。資格取得については、受験者・合格者の増加を目指し、生徒主体の実践意識浸透を目指す。教師、生徒の協働によって教育活動の一体感を目指す。生徒主体の実践を促進する。学業と進路の問題では、特に次の内容に留意する。

ア 学ぶことと働くことの意義の理解

イ 主体的な学習態度の確立と進学指導センター・図書館の利用

ウ 教科・科目の適切な選択

エ 進路適性の理解と進路情報の活用

オ 望ましい勤労観・職業観の確立

カ 主体的な進路の選択決定と将来設計

(4) キャリア教育 校内研修会

a. 基調講演骨子（外部講師 渡辺三枝子）

「キャリア教育の理解と進め方」

(1) キャリア教育の流行の意味するもの、過渡期にあるキャリア教育

(2) キャリア教育が必要となった背景についての再認識

(3) キャリア教育のもたらした混乱と疑問

「職場体験＝キャリア教育」ではない、「キャリア教育＝進路指導」ではない

「キャリア教育は、将来計画を立てて、それに向かわせること」

なぜ学校間連携が必要か？、学力向上との関係は？、誰が担当者なのか？

どのようなプログラムをすればよいのか？

(4) キャリア教育とは何か？

キャリアに意味すること

「いま」を大切に：「いま」の大切さをわすれて「将来」の準備はできない

生徒にとっての仕事は「学ぶこと」、学ぶことは「生きること」、生徒にとっての社会は「学校」

学校が学びの場、生きる場、仕事をする場であることを認識して、最大限に生かすこと

(5) キャリア教育の進め方: 成功した学校から学ぶ

キャリア教育についての教師の理解の促進が土台、地域、保護者の理解と協力を重視

全教師が理解し、取り掛かれることから実施

「二つと同じキャリア教育実践はない」= 各学校独自の進め方

(6) キャリア教育の核を再認識することが出発

一人ひとりの児童生徒に目をかけることが基本、キャリア教育を進めるために求められること

「子どもたち一人ひとりの日常の経験の積み重ね」としての日常生活という考え方を重視

経験の主体である児童生徒が経験を通して感じ、考える機会を作ること

正解を求めるのではなく、「気づく」ように援助することが重要

「学習こそが児童生徒にとって重要な活動であること」が意味することを知ること

教科教育の重要性の再認識

b. グループワーク・ワークショップ

ディスカッション、学年ごとにそれぞれ4～6名程度のグループでテーマに沿って行う。

問題提起

自分や他人に対する認識

意見の統一を強制するものでもない

教師として、自分として、キャリア教育をどう考えているのか

ディスカッション

学年ごとにそれぞれ4～6名程度のグループ

日ごろ感じている、思っていることをフリートークキング

提言（多数、一部のみ記載）

グループの中で何を話したかという振り返りが必要

特定の教師の話の聞いて何かひらめいたことはないか

「キャリア教育」に対して自分はどう考えているのか

教員のコミュニケーションが必要

価値観の違う人間が共同・協力して取り組むべき

会話・話し合いは共同作業の始まり

教員同士の共有意識・意思疎通が必要

自分の学んだことを話すことで自信を深める、そしてコミュニケーション能力を養い、社会人としての資質を向上させることが必要

一人一人の生徒が何を体験し何を考えて成長するのか、そのチャンスを与えるべき

自分の体験を振り返り、これからの自分をどう成長させるのか

自分の生き方を自分で創ること、体験を積み重ねていくことが「キャリア教育」

自分の体験の価値付け、他者との関係・社会の中で共存関係の中で体験として味あわせることが必要

チャンスを教師は導き出してやるのが仕事であり、日常の教育活動を見直すべき

多様な教師(キャリア)が多様な生徒に対応できる

教師として「キャリア教育」のあり方をきちんと評価するべき第二段階に入ってきた

他者を認め合い、他者からの影響を受け入れ、生徒にそのチャンスを与えるのが「キャリア教育」

生徒には「進路指導」という枠組みで、キャリア教育を自然に浸透指導すべき

グループディスカッションを今後の学年会議でも有効に活用したい

c. 教職員の共通理解

研修会后、教師は全員キャリア教育についての考えをレポートにまとめ、今後の資源とした。次は、その一つのレポートの要約である。

『キャリア教育の理解と進め方』

私は、予てから学校で学ぶことそれ自体がある意味、ある部分、その人の「経験」になり、「キャリア」に繋がっていくものだと思っていた。ここ数年来、生徒と関わり生徒の悩みや保護者の悩みや先生方の悩みを聴き可能な限り対応してきたつもりである。今回の研修会で学んだことは、今まで考えて実行してきた方向性を後押ししてくださる内容であった。例えば、進路変更時の生徒の様子から「何を見て取れる」か、他に「どんな支援ができる」か、職業体験における「意味・目的」の捉え方、伝え方、結果の扱い方。ルールを守ることや我慢することなど、すべての基礎にある教育の体制づくりの重要性など。「キャリア教育」と銘打たれたことに対する、本質的なあるいは本来目指すべき方向を、またそこで必要ないくつかの能力について学べた。私は F 高等学校の

教員として、教師集団の一員として、保護者の方から預かっている生徒とどのように接していかなければならないかを、再度考えていかなければならないと感じた。当然、全体指導も必要、個別指導も必要、グループ指導も必要である。しかし、一人ひとりに違いがあるように、一人ひとりに対する対応のあり方も工夫していかなければならないと実感した。ただ漫然と教科指導、クラブ指導だけに明け暮れている教師や指導者は仕事半分なのかも知れない。そうではなく、担任は当然であるが、教科・クラブを含めて教員全体が、研修内容をしっかり自己消化(理解)し、それぞれが取り組める内容を見つけ、教員同士で連携を取り合い、教員同士が切磋琢磨する姿、努力している姿勢、生徒への思いの強さを、生徒としっかり対面して示し、共に前向きに進んでいく工夫をしていく必要があると思った。これから私達がなすべきことは、すべての基礎・基本の部分にしっかり目を向けて、教師集団が強くスクラムを組んで、生徒に対し、学校というある意味小さな社会から、とてつもなく大きな大人の社会に出て行くために、現時点で可能な最善の準備を工夫し、体験させ、経験を積み上げさせ、生徒自身が自立していけるように導くことだと思う。当然であるが、保護者の“思い”にもこころを砕き、共に歩む姿勢も大切であると考え。また、それが出来るのも教師である我々なのだと再認識したところである。私は、『キャリア教育』を人に対する人格形成の大切な『場』と捉え、本校を選んで入学してくれた生徒達に、たった3年間であるが、その大切な3年間を使って、彼らにとってより良い「人間形成の場」を提供できるように、これからも努力していきたいと思う。

キャリア教育の継続

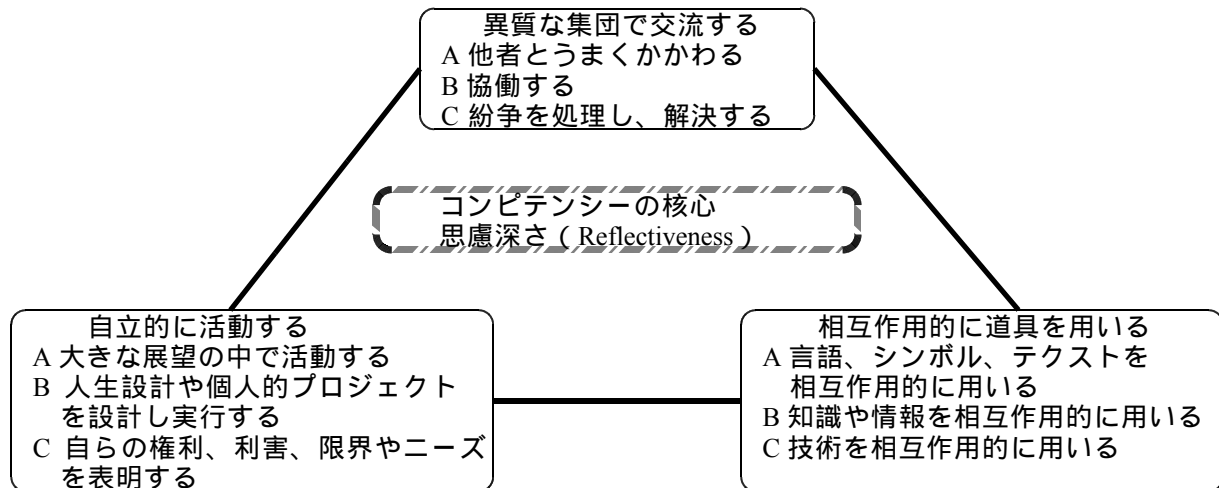
私は2009年(平成21年)度で退職し、私立高校の校長も辞した。そして2010年(平成22年)度から福井大学教職大学院の客員教授として、微力ではあるが大学院のお手伝いをさせていただいている。この教職大学院での様々なプログラムや学びを通して、キャリア教育の必要性をさらに強く感じるようになった。わが国のキャリア教育の活動は、文部科学省の指導もあって小学校や中学校で熱心に取り組まれているが、高等学校においては従来からの進路指導教育との関係もあって遅れてしまった感がある。前述した私の横軸のカテゴリー H4、H5 における高等学校での実践の中でも、様々な会議や研究会などにおいてキャリア教育に関する話題は少なく、関係図書なども多くはなかった。しかし、教師の力量を高める縦軸のカテゴリーとして、キャリア教育は大変重要であるという認識を強く持っている。生徒はこれから益々グローバルな社会で、力強く生きてい行かなくてはならない。そのためには、キャリア教育が目指す力をつけていくことは不可欠である。高等学校だからこそできるキャリア教育を、学校独自の大きな教育運動として進めていくことは、生徒たちにたくましい力を育むことになる。その意味で高等学校においても、キャリア教育が継続した教育活動として根付くことを願っている。ここで現時点において、キャリア教育が目指す社会的・職業的自立に向けての基礎となる能力と、キャリア教育の推進に留意すべき事柄について確認し、今後のキャリア教育の方向性を問い続けていきたいと思う。

1 DeSeCoプロジェクトのキー・コンピテンシー

社会的・職業的自立に向けての基礎となる能力については、経済開発協力機構(Organisation for Economic Co-operation and Development、以下 OECD)が、1999年～2002年にかけて行った生徒学習到達度調査(OECD Programme for International Student Assessment、PISA 調査)の協力で実施された「能力の定義と選択」DeSeCo計画(Definition and Selection of Competencies Project)において、国際的合意を得た新たなコンピテンシー(competencies)という能力概念の発祥と、わが国のキャリア教育における能力論は流れを同じくするものと考えられる。20世紀末頃より、職業社会ではこのコンピテンシーという能力概念が普及し始め、従来の学力を含む能力観に加えて、その前提となる動機付けが

ら、能力を得た結果がどれだけの成果や行動につながっているかを客観的に測定できることが重要であるという視点になってきた。言葉や道具を行動や成果に活用できる力（コンピテンス）の複合体として、人が生きる鍵となる力、すなわちキー・コンピテンシー（key-competencies）が各国で重視され始めた。そしてこのキー・コンピテンシーが、これから知識基盤社会を担う人々に必要とされるものであり、単なる知識や技能だけでなく生活の中で働く能力であり、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して特定の文脈の中で複雑な課題に対応できる能力となっていくという考え方である。この能力が求められるのは、わが国でも同様であり、これこそがキャリア教育の大きな目標の一つであると考ええる。

DeSeCo プロジェクトによる3つのキー・コンピテンシー



2 キャリア教育が目指す社会的・職業的自立に向けての基礎となる能力

キャリア教育のキーワードとなる「生きる力」については、いくつかの変遷があった。近年になって文部科学省の手引きにおいて、

基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力（確かな学力）。
自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性（豊かな心）。

たくましく生きるための健康や体力（健やかな体）

などが示され、より具体的になった。また、2002年（平成14年）に国立教育政策研究所生徒指導研修センターが一つのモデル例として提示した「4領域8能力」がキャリア教育の枠組みの例として取り上げられた。

4領域8能力とは、

人間関係形成能力(自他の理解能力、コミュニケーション能力)

情報活用能力(情報収集・探索能力、職業理解能力)

将来設計能力(役割把握・認識能力、計画実行能力)

意思決定能力(選択能力、課題解決能力) である。

この能力は以後も広く知られるようになり「例」を省略して取り上げられるようになった。しかし、その後類似性の高い「人間力」「社会人基礎力」「就職基礎能力」など能力論と共に、新たな分析を加えて、分野や職種にかかわらず社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を再構成して提示することになった。その結果得られたのが、2011年（平成23年）1月にまとめられた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」に示された「基礎的・汎用的能力」である。

基礎的・汎用的能力は次の4つの能力である。

「人間関係形成・社会形成能力」

多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め役割を果たしつつ他者と協力協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。例えば、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等があげられる。

「自己理解・自己管理能力」

自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。例えば、自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等があげられる。

「課題対応能力」

仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。例えば、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等があげられる。

「キャリアプランニング能力」

「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。例えば、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等があげられる。

各学校においては、「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換を徐々に図っていくことになる。

3 キャリア教育の推進において留意すべき事項

キャリア教育において「生きる力」と同様、「学び」は重要なキーワードである。国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官藤田晃之氏は、国際教育到達度評価学会（IEA）国際数学・理科教育調査 The Trends in Mathematics and Science Study (TIMSS)TIMSS 2007（中学2年生対象）及び OECD・生徒の学習到達度調査（PISA）PISA2003 PISA2006 PISA 2009（高校1年生対象）における国際比較を通して、成績は上位に位置しているがわが国の教育の本当の危機は、学びに対する興味関心の希薄さ、将来との関連性が見えないままでの学び、受験終了後に剥落する「知」の危険性を指摘している。キャリア教育で重視すべきは、この教育課題の克服でもある。同氏は、キャリア教育充実のための基本となる事柄として次の8点を指摘している。

各学校におけるキャリア教育に関する方針の明確化

各学校の教育課程への位置付け

多様で幅広い他者との人間関係の形成

社会や経済の仕組みなどについての理解の促進

体験的な学習活動の効果的な活用

キャリア教育における学習状況の振り返りと、教育活動の評価・改善の実施

教職員の意識や指導力の向上

効果的な実施のための体制整備

キャリア教育は漠然としていて何をどう進めてよいかわからないとか、すべての教科や活動をリストアップして教育計画と目標を掲げ実施するのであれば、従来の学校教育と何も変わりがないなどの指摘は、キャリア教育の推進を鈍化させていく。前述したわが国における教育危機を正面から捉え、社会的・職業的自立に向けての基礎となる能力として今何が問われているかを共通理解としていけ

ば、このような疑問は払拭されるのではないだろうか。キャリア教育を実践している学校では、おおむねこの8項目の指摘は念頭において推進していると思われるが、さらにキャリア教育を推進させていくために今一度精査すべき内容で、このキャリア教育の流れが研究・探究・発信などを通して広く他へ波及していくことが臨まれる。

おわりに

教職大学院の教職専門性開発コースの院生は毎週木曜日に「木曜カンファレンス」を行っている。このカンファレンスは、毎週木曜日に、開発コースの院生同士とスタッフが、その週の学びや授業の振り返り、共通のテーマ学習などを、全体で、さらにグループで省察を含めて議論し話し合う場で、開発コースのプログラムとして大変内容の濃いものである。今年の10月13日(木)の共通テーマとして「資料を読み、キャリア教育の在り方について検討する」が取り上げられ、準備された資料を読み、各グループで話し合いを持った。私はこのカンファレンスに丁度参加したので、若い教師を目指す院生がこのテーマを取り上げたことに、まず大変嬉しい思いがした。それは、キャリア教育の必要性、キャリア教育の定義、キャリア教育の意義を話題にしたものであったが、私が担当したグループでも多くの話し合いがなされた。「教育の合体でやるのだと気づいた」「授業の中でやるのだと気づいた」「実際インターンシップの拠点校である中学校ではキャリアデザインプロジェクトとして実施している」「職場体験を行っている」「漠然としていて難しい」「自分を高め自己実現していく教育なのか」など様々な思いが熱く語られ、あっという間に時間が過ぎた。院生の多くは、高校時代、進学指導室が学校にあったことは記憶にあるが、学校における進路指導教育はいかに行われているか、ましてやキャリア教育については情報としては書物などで得ているが未知の世界である。これから教職に就き、このような若い教師がどんどん新しい感覚でキャリア教育を推進する時代が到来することを思うと、とても頼もしく思う。それ故に、院生との議論は新鮮で、心地よいものであった。

キャリア教育の実践の際には、一人一人の子どもをかけがえのない存在として大切にすると同時に、子どもたちが社会の中に生きているということを忘れてはいけない。米国の哲学者ジョン・デューイは著書「学校と社会」(1899年)の中で、「学校制度を社会生活という、より大いなる全体の一部分として眺めなければならない」と述べている。子どもたちのために学校を社会と有機的に関連させることの重要性、さらに知の学習においても社会と学校の関連づけが欠如していることを、約100年前に指摘している。これは教育改革の理念として、これからの学校を、そしてそこで行われる教育の在り方を強く教えてくれる。昨年3月に起きた東日本大震災・津波・福島原発事故という未曾有の大災害によって、私たち自身の生き方を深く考えさせられる日々が今も続いている。あらためて、学校は社会の一部であり、子どもたちは社会の中で生きていることを認識し、教育の場でそれを行動化するキャリア教育の意味が明確になってくる。

教職大学院が高度専門職業人としての教師像を目指すとするれば、高度な専門性の追求、その分野のスペシャリストとしての成熟、そして培ってきた専門性を学校づくりに生かすという教職キャリア構築への方向性は不可欠である。進路指導教育・キャリア教育分野は、今後益々教師の力量形成という側面からも、縦軸の重要なカテゴリーの一つになっていくものと考えられる。その意味で、大学院教育のスタンダードモデルの創造において、このカテゴリーを取り上げ、教育を多面的に捉えた福井大学教職大学院を発信源として、進路指導教育・キャリア教育の実践が広く波及していくことを希望してやまない。

参考文献

- 1 「学習する組織 システム思考で未来を創造する」ピーター・M・センゲ
枝廣淳子 小田理一郎 中小路佳代子 訳 英治出版
- 2 「コミュニティ・オブ・プラクティス」エティエンヌ・ウェンガー、
リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー
野村恭彦 監修 / 野中郁次郎解説 / 櫻井祐子訳 翔泳社
- 3 「学校と社会 デューイ(著) John Dewey (原著)、宮原 誠一 (翻訳) 岩波文庫
- 4 「サンデル教授の対話術」マイケル・サンデル 小林正弥 NHK 出版
- 5 「梅棹忠夫に挑戦する」石毛直道、小山修三編集 中央公論社
- 6 「KJ法 - 混沌をして語らしめる」川喜田 二郎 中央公論社
- 7 「キャリア教育 自立していく子どもたち」渡辺三枝子 東京書籍
- 8 「進路指導・キャリア教育の理論と実践」吉田辰雄 篠 翰 日本文化科学社
- 9 「学校教育とキャリア教育の創造」渡辺三枝子/鹿嶋研之助 学文社
- 10 「生き方の教育としての学校進路指導」内藤 勇次 編著 大路書房
- 11 「進路指導論」仙崎 武 野々村 新 渡辺三枝子 編著 福村出版
- 12 教職課程講座第7巻「生徒指導 生き方と進路の探究」仙崎武編著 ぎょうせい
- 13 新教育心理学体系「進路指導」寺田 晃+佐藤 怜監修 中央法規
- 14 「最近の生徒指導と進路指導 その理論と実践」吉田辰雄 編著 図書文化
- 15 「進路指導の理論と実践」小竹正美 山口政志 吉田辰雄 日本文化科学社
- 16 「MyLife マイライフ - いきいきとした学校生活をめざして - 福井県教育研究所
- 17 「適応指導教室からのメッセージ - かえる - フレンド学級の子どもたち」
福井県教育研究所
- 18 「デジタル教科書のゆくえ」西田宗千佳 T A C 出版
- 19 「キャリア教育のススメ」国立教育政策研究所生徒指導研究センター編 東京書籍
- 20 「キャリア教育を創る」国立教育政策研究所生徒指導研究センター 編集・発行
- 21 「高等学校 キャリア教育の手引き」 文部科学省
- 22 「まるやかな心」 巨田元尚 巨田尚彦編
- 23 「高校教育と学校カウンセリング」 巨田尚彦